

# 五重相伝会勸誠綱要

中西随功 編



五重相伝会勸誠綱要

中西随功  
編



# 五重相伝会勸誠綱要

中西随功  
編



## 序（日本の五重相伝） 淨空法師

淨土念佛法門乃是一乘了義、萬善同歸、三根普被、凡聖齊收、橫超三界、徑登四土、極圓極頓、不可思議之微妙法門也。中國自初祖東晉慧遠大師起、歷代念佛往生極樂世界者、多不勝數、誠如二祖善導大師所言「萬修萬人去」也。

日本淨土宗乃距今八百多年前、法然上人根據善導大師之理念所創、力主持名念佛法門、仰仗阿彌陀佛大誓願力、帶業往生。曾經盛極一時、無量衆生因之得度生死苦海、觀乎《無量壽經》注疏之盛、可見一斑矣。

奈何近四百年來、由於西風東漸、寺院講經說法之傳統不復施行、遂使佛教各派式微、淨土法門亦難倖免。又高才之士多由學術觀點研究佛學、少有講求真實修行者、遂如雪上加霜、令淨土之修行流於理論與形式、可不惜哉。

「五重相伝会」乃日本淨土宗傳授念佛法門教法真髓之重要法會也、得以施行於法衰世亂之今日、實為稀有難逢。

中西隨功長老發大菩提心、深信切願、求生淨土。並以與復淨土宗為己任、不辭辛勞、於今年四月主持「五重相伝会」法會於妙見山白翁寺、並將法會之講法內容編輯成書、以期刊行出版、廣利大眾、實為功德無量之大事因緣也。囑序於余、余未悉此法、然感於長老為法之誠、卻之不恭、謹敘因緣以應爾。

二〇一三年九月二十八日 釋淨空 時年八十有七

釋淨空法師の序の日本語訳

淨土宗の念仏法門は一乗了義、万善同歸、三根普被、凡聖齊収、横超三界、径登四土、極円極頓、不可思議で微妙な法門なり。中國淨土宗の初祖である東晋の慧遠大師を初め、念仏により極楽世界に往生できた人は多くして数えきれません。まさに淨土宗の二祖である善導大師が言われる通り、万人が修行すれば万人ともに往生できます。日本の淨土宗は今から八百年前に、法然上人が善導大師の理念により創造されました。念仏法門を主に持ち、阿彌陀仏の大誓願力により、業を持ちながら往生できます。曾て一時は盛況でありました。無量の衆生がこれにより救われ生死の苦海から救われました。『無量壽經』の注疏が沢山あることにより当時の盛況が伺えます。残念なのは最近の四百年來、西洋文化の伝來により、寺院は講經説法の伝統を失い実施しないために、仏教各派は段々と衰微しています。淨土法門もまた同じです。また高才な人師は學術の視野で仏教を研究しています。現実に修行する人は少なく、まるで傷口に塩を撒いたようです。淨土宗は理論と形式だけが残っています。本当に惜しむべきことです。

五重相伝会は日本の淨土宗において念佛法門の教法の真髓を伝授する大切な法会であります。仏法の衰えた今日には実に意義があります。

中西随功長老は大菩提心を発して、深信切願、求生淨土、心労にも拘わらず今年四月に妙見山白翁寺にて五重相伝会の法会を勤修いたしました。さらに講法の内容を編輯して刊行出版して、広く大衆に利益を与えようとされています。実にこの功德は無量であり、大事の因縁であります。序文を依頼されました私は五重相伝の真義を得ていません。だが長老の誠意に対して恭しく謹んで叙を寄せます。

二〇一三年九月二十八日 釋淨空 時年八十有七

## 序

悟道法師

人生世間、吉凶禍福、相為倚伏。其所得損益、唯在人之善用心與否耳。諸佛愍念一切衆生、為三苦八苦無量諸苦之所逼惱。因思所受苦報、由於過去惡業所感。而所造惡業、由於當六塵境、不了如幻如化、妄起貪瞋癡心之所致也。是知貪瞋癡之煩惱、乃一切衆生之大怨家。從茲以戒定慧、斷貪瞋癡。復還本具之天真、以成無上之覺道。然則三苦八苦等、實三世諸佛之導師、而一切衆生永離衆苦、常享諸樂無上之良緣也。「五重相傳會勸誠綱要」者乃法然上人從中國唐代淨宗二祖善導大師、學習佛說觀無量壽佛經疏、帶回日本建立西山淨土宗、由日本淨宗歷代祖師、相傳五重念佛往生淨土之方法、普令一切衆生、同于現生、往生極樂世界、或頓或漸、證無生忍、以至圓成佛道之大法也。凡夫仗佛慈力、帶業往生、即已超凡入聖、證不退位。從茲漸修、必至圓滿菩提而後已。觀經中品戒善世福、下品作衆惡業、乃五逆十惡、將墮地獄、由稱佛名、遂得往生也。如是力用、最為洪深。蓋由阿闍世王、乘大願輪、示為逆惡、囚父禁母、而為發起。其母厭離娑婆、願生極樂。並為未來衆生、求往生法。五重相傳會念佛往生方法、依據觀經善導疏而立此法、今日日本淨宗大德、中西隨功法師著作講解「五重相傳會勸誠綱要」一書、擬出日文版流通、以方便修習淨土法門者、堅定信願念佛之志、個個往生西方淨土。囑序於余、爰贅數語以隨喜云。

公元二零一四年歲次甲午季秋

悟道法師の序の日本語訳

人生世間の吉凶禍福の源は同じである。それ得るところの損益はただ人の心の持ち様による。諸佛は一切衆生が三苦八苦や無量なる諸苦のために逼悩しているのを愍念されている。受ける苦報を思う故に、過去よりの悪業を感ずる。而して造るところの悪業は六塵の境により、幻化の如くなるを知らず、妄りに貪瞋癡の心の致すところなり。ここに貪瞋癡の煩惑を知るにすなわち一切衆生の大怨家なり。これより戒定慧を以て貪瞋癡を断ずる。また本具の天真に還りて、以て無上の覺道を成ず。然れば則ち三苦八苦等は實に三世諸佛の導師にして一切衆生は永く衆苦を離れ、常に諸樂無上の良縁を受くるなり。『五重相伝會勸誡綱要』はすなわち法然上人が中国唐代の淨宗二祖である善導大師の『佛説觀無量壽佛經疏』を學習して、日本に西山淨土宗を建立される。日本の淨宗歴代祖師により五重相傳會の念佛往生淨土の方法を傳えられ、普く一切衆生をして、同じく現生に極樂世界に往生せしめ、或いは頓或いは漸に無生忍を證して、以て佛道の大法を圓成するなり。凡夫は佛の慈力により、業を帯して往生し、即ち已に超凡入聖し、不退位を證す。これにより漸に修して、必ず後に圓滿菩提に至る。

『觀無量壽經』の中品の戒善世福、下品の作衆惡業すなわち五逆十惡は將に地獄に墮し、佛名を稱

するに依り、遂に往生を得るなり。この力用は最も洪深なり。蓋し阿闍世王は大願輪に乗じて、為に逆惡を示し、父母を囚禁して、為に發起する。その母は娑婆を厭離し、極樂を願生する。並びに未來衆生の為に、往生の法を求む。

五重相傳會の念佛往生の方法は觀經善導疏に依據して此法を立てる。今、日本淨宗の大徳、中西隨功法師は『五重相傳會勸誡綱要』一書を著作講解され、日文版を流通され、淨土法門を修習する者に、堅く念佛を信願する志をもって、西方淨土に往生できることを定める。

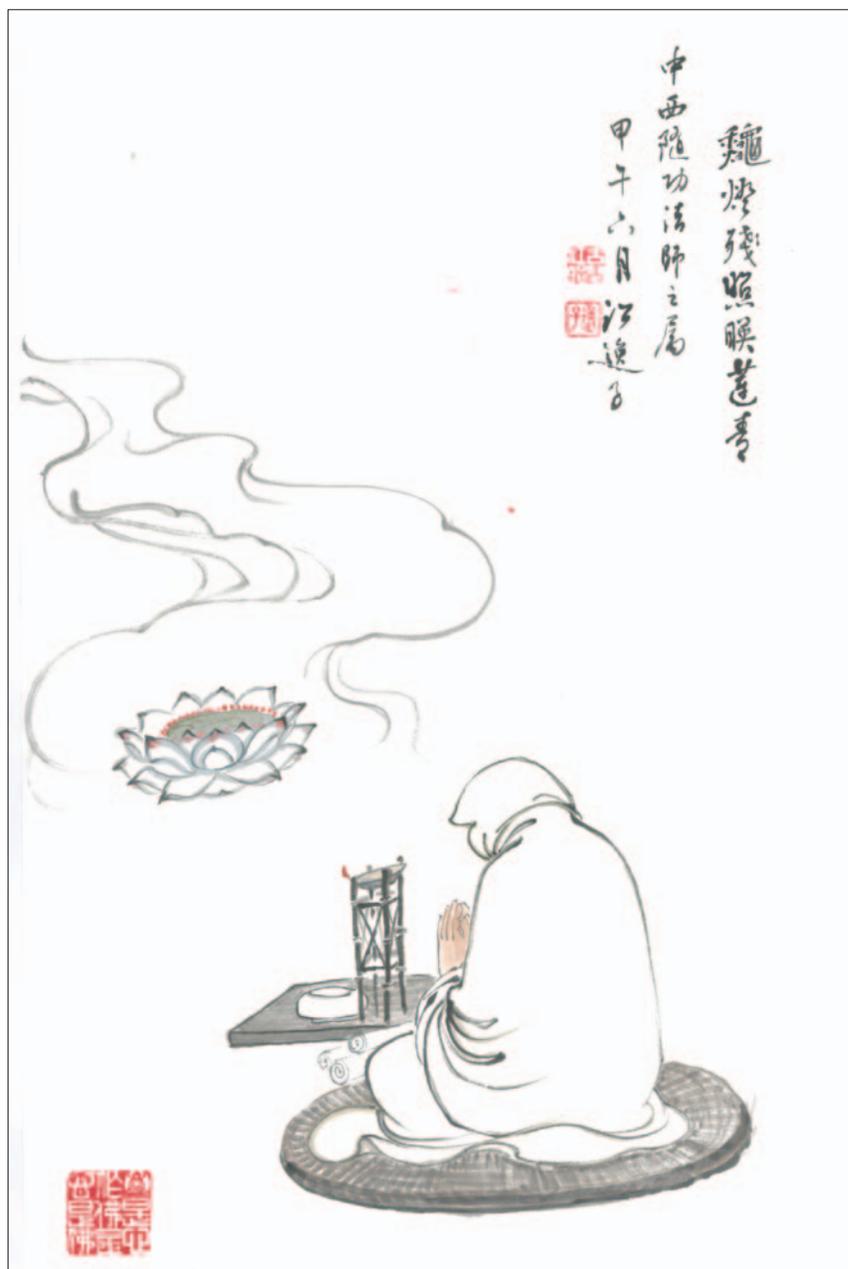
本書の出版にあたり余に序文を依頼されここに隨喜の一文を寄せていただく。

公元二零一四年歲次甲午季秋

釋悟道謹序澳洲淨宗學院隨喜居

序（佛画）

江逸子画伯





伝燈師と随喜住職



内道場



本堂勤行



勸誡（説法）



勸誡（説法）



勸誡（説法）



勸誡（說法）



伝燈師

## はじめに

この書物は妙見山霊亀院白翁寺にて平成二十五年（二〇一三）四月二十六日から二十九日の四日間に開筵された五重相伝会の勸誡（説教）の記録である。伝燈師と勸誡師は住職である中西随功が勤めた。

実は白翁寺の先住である南方正道師より、平成二十五年四月の五重相伝会では自分が伝燈師を勤めるから、中西随功は勸誡師を勤めてほしい旨の依頼を受けていました。しかし、誠に残念なことに南方正道師は開筵の二年前になる平成二十三年（二〇一一）正月に逝去されました。このような事情から、今回の五重相伝会では私が伝燈師・勸誡師を共に勤めさせて頂くことになりました。

五重相伝会は当山では三十五年程前に開筵されました。稀有な法縁に出逢えて法喜充満でした。五重相伝会は体験してみなければわからない世界であります。念仏の信仰は説明だけではなかなか理解できないのであり、体験を通して作法受得していただく法縁であります。

受者の皆様にとっては仏法を修学される大変良い機会ではないかと思えます。身と心に浸み渡ってゆく素晴らしい仏法が、言葉としては表現出来なくとも、自然にその教えの尊さが受者の心に有難く受けられ、これからの人生の大きな支えとしていただけます。

今回、四日間に亘って勸誡させて頂く五重相伝会は、きっと将来にたとえ苦しい事や悲しい事など

に遭遇したとしても五重相伝会を受けられたことが心の拠所になることでしょう。ここに『五重相伝会勸誠綱要』を刊行いたします。もとより念仏の法悦を将来にわたり持続して頂くことを願っております。

## 第一席

「三帰依の文」

人身受け難し、今すでに受く。仏法聞き難し、今すでに聞く。この身今生こんじょうにおいて度せずんばさらに何れの生いずにおいてかこの身を度せん。大衆もろともに、至心ししんに三宝さんぼうに帰依したてまつるべし。自らみずか仏に帰依したてまつる。

まさに願くは衆生とともに、大道だいどうを体解たいげして無上意むじょういをおこさん。

自ら法に帰依したてまつる。

まさに願くは衆生とともに、深く経蔵きょうぞうに入いりて、智慧海ちゐゑの如くならん。

自ら僧に帰依したてまつる。

まさに願くは衆生しゆじょうとともに、大衆たいしゆを統理とうりして一切無礙いっけむがいならん。」

釈尊は二千五百年前にインドで人間として誕生され覺りを開かれ、仏陀（目覺めた人）になられました。この釈尊の心の中で感受された仏が阿弥陀仏であります。

釈尊はある時にガンジス川の川縁で右手で砂を握られて弟子たちに尋ねます。「この一握りの砂と、この河原にある砂とどちらが多いか」。当然ながら弟子たちは「河原の砂です」と答えます。そこで

釈尊は説かれます。「私達が人間として生まれてきたことはこの一握りの砂のように稀有である」。さらに釈尊はこの右手の一握りの砂を左手の爪に落とされて、「爪の上の砂と落ちた砂はどちらが多いか」と尋ねます。当然、弟子たちは「爪の上の砂は少なく、落ちた砂が多いです」と答えます。すると、釈尊は仏教に出会えるのは僅かに爪上に残った砂の如くに少なく、稀有で奇遇なことである」と説かれます。今、受者の皆さんはこんな稀有な幸せの境遇にいます。

私たちには父親と母親がいて、その前の世代では祖父・祖母がいます。すると、二人・四人・八人・十六人・三十二人等々と命が繋がっています。この中で一人でもこの世におられなかったら、私も皆様もこの命を頂けていないのです。十世代遡ると千二十四人です。そして二十世代では実に百四万八千五百七十六人です。さらに三十世代では十億三千七百四十一万千八百二十四人です。釈尊は人間に生まれられたことは、真に稀有で奇遇なことであると弟子たちに説かれました。

今、この世に人間として生まれ、また、仏・法・僧の三宝との法縁に預からなければ、五重相伝会の受者となることも出来ないのです。折角の法縁ですから、しっかりと静かに仏の声なき声を聴いていただき、この世に人間として生まれた尊さに気づかせていただきたいものです。今ここでまさに仏・法・僧の智慧を聴くことが出来ると素直に喜べるのであります。

さらに自身の命が尽きるとしても、自らの業により生まれ変わる世界は六道ではなく、阿弥陀仏の来迎を得られて西方極楽浄土に往生させていただける。心から確たる阿弥陀仏への信仰を頂きましよう。受者の皆様と共に仏・法・僧に帰依を深めていきたいものです。

大道（念仏）を体得し、智慧により悟りを開きましょう。そしてお互いに尊敬の念を持ち、明るい人生に致しましょう。

「若し人、真に我が身を愛するならば、悪より己おのれを守れ、青年の時、壮年の時、若しくは老年に及びても、一度は目覚めよ」

（『法句経』）

もし、人間として生まれ、自身を愛するならば、悪い事はしない、若い時、壮年の時、もしくは老年になってからでも、いちどは目覚めなさい。人間として生まれたからには仏法に出会って目覚める心を求めていきましょう。このことは釈尊の經典『法句経』に説かれています。

「受け難き人身を受けて、あひ難き本願ほんがんにあひて、発し難き道心を発して、離れ難き輪廻りんねの里を離れて、生まれ難き浄土に往生せんこと、よろこびの中おこのよろこびなり」

（法然上人『勅修御伝』第二十一、「一紙小消息」）

なかなか人間として生まれることも難しいのであるが、幸い私たちは人間界に生まれ、浄土の教えにも出会えました。このことは真に稀有であり奇遇であります。そして輪廻の世界を離れ、西方極楽

浄土へ往生出来ることは真に喜ばしいことであります。

釈尊の仏教は長い歴史の中で、日本では中国の善導大師から浄土教、即ち、念仏による往生、浄土において仏になると言うことを法然上人（一一三三～一二二二）によって伝えられた教えです。六道の迷いの世界から解脱し、一心に念仏することによって西方極楽浄土に往生できるのです。

「たった一人しかない自分を、たった一度しかない一生を、ほんとうに生かさなかつたら、人間生まれてきたかいないじゃないか」

（『路傍の石』 山本有三著 栃木県 山本有三文学碑）

人間として生まれることも難しい中で、幸い人間として生まれた機会を活かさなければ、生まれてきた甲斐がありません。

**サーカスの綱渡り芸 擬死再生 死を見すえるところに見事な人生を生きられる。**

いつかサーカスの綱渡りの曲芸が報道されていました。華麗なる曲芸に引きつけられて見ていました。一本の綱の上を見事に渡りきっています。その曲芸師にインタビューがなされた。「どのようにして、揺れ動く綱の上を渡りきれのですか」、との率直な質問でありました。私はその時、きっと足下を見つめて一歩一歩を進めているからと答えるであろうと思いました。ところが、私の予期した答えで

はありませんでした。曲芸師は「綱がどんなに揺れ動いたとしても、私は決して足下を見ません。足下に気が取られますと、必ず綱から落下してしまいます」と答えたのです。さらに、「私は綱がどのようなであつても、常に向こうの綱の結び目を凝視しています。そうすることで落下しないのです」と話された。

この予期しない答えを聞いた時、人生の綱渡りについて教えられました。人生という一本の綱渡りを渡れる方法であります。人間はややもすると目先のことに執われて生活しています。それでは人生の綱渡りから落下してしまうのです。人生の綱の向こうの結び目は自分の死であります。自分の死を見つめることは大切であります。釈尊の出家は人生の真実の苦しみの相を諦らめることから始まっています。

「嗚呼、弘誓の強縁は多生にも値い難く、真実の淨信は億劫にも獲叵し、偶々行信を獲ば、遠く宿縁をよろこべ」

(親鸞聖人『教行信証』)

ああ、阿弥陀仏の本願には遇い難いのであります。さらに真実の信仰も得がたいのであります。だが今この様に念仏信仰が得られる機会は、遠い昔からの法縁であることを喜ぶべきであります。

## 谷本啓子『マーちゃん先生』

谷本啓子様『マーちゃん先生』は次男で中学二年生の誠君（十三歳）を亡くされた体験記であります。誠君が学習塾のビルの六階の窓から転落して、不慮の死をとげたのは昭和五十九年（一九八四）歳末の夕暮れだった。お母さんの谷本啓子様（四十三歳・千葉県松戸市栄町）はそれが逆縁となつて浄土念仏の教えに遭つた。そこから、亡き子への謝恩と、同じ境遇のお母さん方に呼びかけたい思いを込め、体験記『マーちゃん先生』を自費出版された。事故で亡くした息子さんの死により、信仰に目覚めたことが切々と述べられています。

「五十九年十二月二十八日、人生八十年と言われているなかで、誠は十三歳という若さでこの世を去ってしまいました。行ってきます・・・と父親に言葉を残して三十分後。あれから、もう六年が過ぎてしまいました。いつになつても、亡くなった子の年を数えると申しますが、生きておれば、あの子も来年は成人式を迎える年になっております。へあどけさの残るあの子が、背広を着る。そんなことを空想すると、涙がこぼれてまいります。あれも、これも、何かにつけて悲しみは新たに湧き上がり、胸を締めつけ、寂しさと、今も戦う毎日です。忘れようにも、忘れられないあの子、愛しくて、もったいないのちでした。しかし、愛しいあの子を亡くしてみなければ、いのちというものがいかに尊いことかということが、この身、全部がわからずの私でした。子を亡くしてみなければ、このいのちの尊さというものを原点とした、あらゆる教えに出遇うこ

とのできなかつた私です。悲しいことですが、ありがたいことでもあります。一つ、一つ、教えに出遇った感動は、誠のいのちとかよいあえるときです。まさに、なむあみだぶつの世界の中であの子を、思いきりだきしめさせていただいています。ようやく私はここに、あの子と共に生かされている、もつたいないこのいのち、そのように思えるのです。そんなとき、住職さんからいわれた〈誠君は、皆さんより先に亡くなられておりますが、人生の師なんですよ〉。その言葉がふと、思い出されます。その意味をこめて、この本の題を『マーちゃん先生』としました。」

「あの子は、説教という花になり、ときおり顔を出す。

〈おまえを生んだ親なのだから〉と自惚れ浮かれていた私に、〈ほら、たった一つのいのちも救うことのできないお母さんが、生きているじゃないか〉と、ピシヤリと私のホホをたたき、切ないね―懐かしいね―」

「―出逢い― よく母は鍋に水を入れ、こびりついている御飯を一粒、一粒手ですくい、口の中に入れ、台所に立っていた。そんな母の姿に私は〈貧乏たらしいことはやめてよ。そんなことまでして辛抱したって、暮らしが楽になるわけでもないのに〉と罵倒した言い方をよくしていたのは、あれは中学二年か三年のころではなかっただろうか。そんなとき、母はきまってこう言っていた。〈何が貧乏たらしいんだ。米粒一つにだっていのちがあるんだよ。なんだこんなものって

捨ててしまったらゴミになるばかりだよ、ありがたいと思って、身体の中に入れるもんはみんな身になってくれる。おまえのようにあれも、これも欲しいとお金で買うものはきりなく続くもんだよ。世の中にはお金で買えないありがたいもんがあるんだよ。と言った母のことば。あれから、もう何十年が過ぎてしまったのだろう。私は今、台所に立ち母の真似ごとをしている。あのころの母の心情も今なら痛いほど理解させていただけなのに……。誠がいなくなると、私の中に、あれほどつまっていた物質的欲望が、スウーと抜けていく、そんな気がしました。母の言っていたとおり、お金で買えないありがたいものがあるということが、これほど、身につまされたことがなかった私です。いることがあたりまえだと思っていた我が子を亡くし、はじめて、生かされ、生きていてくれることが、どんなにありがたいことであるのかわかったのですから、全く、愚かな自分であったのだとしか、言いようがありません。どんなにお金を積まれても、誠のいのちは買うことができない私の宝でした。愛しくて、大切な誠を亡くしてみると親として、数知れない後悔ばかり私には残されました。その中の一つ例にあげても、この子たちに不自由のない生活をさせてあげたい。あれもこれも、この子たちのために、だから私は勤めに出ているのだという息巻いた生活。しかし、誠が亡くなり数日が過ぎ去ったとき、〈お母さん、ぼくの家にお金がなかったら、マーちゃん塾に行けなくて、死ななくてもよかったのにねえ〉と篤史が私に言ったのです。そのことばに私は全身脱力する思いでした。私は、本当に子を愛していたのかという問いです。親として、人間として、私が子に望んでいたものは、また、与えていたものは一体なんであった

のだろうか。子へ望む学歴、子に与えた物質面、それらすべては、私自身の中にある醜い打算的心と満足でしかなかったように思える。〈お母さんは、あなたたちを愛しているから自分のものも買わずあなたたちのものを〉とか〈みんな、あなたたちのために〉など、犠牲的精神を子に押し付けて言っていたが、本当に他者を思い、愛するといえることは、そんな次元の低いものではないということではないでしょうか。

「みなさん信仰もちなされ、信仰なしには生きられぬ。心に深く弥陀仏の、慈悲の光りを持ちなされ」

(関本諦承師)

関本諦承師は和歌山県が生んだ女子教育に尽力された高僧であります。和歌山市の修徳高校(現、開智高校)や京都の西山高校(現、京都西山高校)の創設者です。和歌山県では大変有名な方で、皆さんもご存知の方も多いと思います。

「みなさん信仰もちなされ、信仰なしには生きられぬ。心に深く弥陀仏の、慈悲の光りを持ちなされ」と、阿弥陀仏への信仰の心を持ちなさいと優しく勧められています。

信仰は感受の世界、『風の声を聞く子どもたち』（北村智恵） 開眼

北村智恵様というピアノの先生の冊子を読む機会を得られた。「音楽とは表現することである」という見出しのある文章には次のように書かれています。

「今から十年も前の話である。私がまだ音楽大学の学生だった頃、アルバイトにと、自分のピアノの先生が一人の女の子を紹介して下さった。生れて初めて他人にピアノを教えることになった。彼女は幼稚園に通っていて、ひらがながやっと読める程度の幼な子であった。教え始めて何カ月位経った頃だろう。ある日、彼女は、いつもはしっかりと弾くのに、ある曲のその箇所にかかると必ず、何度弾かせてもそこだけテンポを乱し、ゆっくり弾くという不思議な行為を繰り返した。私はとても気になり、彼女に訊いてみた。〈どうしてここだけゆっくりになるの〉。彼女いわく、〈センセ、ここ、とてもきれいな、ふしぎなおとがするでしょう。アタシ、ここ、すぐくすき。たくさんきいていたいもん〉。そこは、彼女にとって初めて減三和音が出てきた所であった。私は、彼女の、この新たな発見と感動、そしてその素直な表現に、ガーンと頭を殴られる思いがした。こんな時、他の先生はどう言うのだろうか。〈拍の長さが間違っている。テンポが乱れてはいけない。最後まできちんと弾きなさい〉。そう言って済ませてしまうのだろうか。私が子どもの音楽に一生を賭けてみようかと決心したのはその日であった。思えば、昔、自分自身が子どもだった頃、蟻の行列を眺めていたら夕立が降ってきたので、大騒ぎして傘を二本もさしてしゃ

がみ続けていた記憶がある。また、サーカスの象が年老いて芸ができなくなったので殺されたという話を聞き、ご飯も食わずに泣いたこともある。しかし、今の私も含めて、現代社会の巨大なメカニズムの中にある大人たちの、一体、何人の人間が、そのような心と素直な表現を持ち続けているのだろうか。草や木や羊たちと話のできた、かつての星の王子様も、ネクタイを締めて満員電車に乗り、他人の足を踏みつけてプラットホームを行き交うのだろうか。自分が大切にしてきたものを表現しないことにより他人と歩調を合わせて生きて行く人間に誰もがなっ行って行ってしまうのだろうか。そう思うと、子どもには、こちらが教わることこそあれ、教えることなんて、何もないと知った。何も教えられないのであればせめて、子どもたち（人間本来の姿）にとって最も大切なものを守って行く仕事をしたい、そう思ったのである。幼なかつたその子との出会いが、音楽とは、自分らしさを表現することであるという、最も常識的で基本的な事柄の本当の重みを私に教えてくれた。その日は、今ある私にとって、記念すべき日だったのである。」

「世の中に 何が苦しと 人間はば、御法みのりを知らぬ 人と答えよ」

（良寛和尚）

## 注

- (1) 三宝とは仏・法・僧の三を敬いの対象とする。
- (2) 大道は念仏のことである。
- (3) 三帰依の文は仏への心からの尊敬（南無の心）の表明である。
- (4) 本願とは阿弥陀仏の四十八願である。
- (5) 輪廻の里とは六道である。六道とは衆生が業（意志にもとづく生活行為）によって生死を繰り返す六つの世界である。三善道（天界・人間界・阿修羅界）と三悪道（畜生界・餓鬼界・地獄界）を自業の結果として生まれ変わる事。

## 第二席

「我昔所造諸惡業、皆由無始貪瞋痴、從身語意之所生、一切我今皆懺悔」  
（我むかしより造る所のもろもろの悪業は無始の貪瞋痴による、身と語と意より生ずる所なり、一切我今みな懺悔したてまつる）

（般若訳四十卷本『華嚴経』卷四十 普賢行願品 懺悔文）

「一人一日中、八億四千の念あり、念々中の所作は皆これ、三途の業」

（法然上人『登山状』『勅修御伝』第三十二）

「もつとも深い懺悔は、懺悔の出来ない私であるという告白である」

（米澤英雄氏 福井市の開業医）

### ●小川一乗 『仏教に学ぶいのちの尊さ』 檀家のリユーマチ

小川一乗師の著書『仏教に学ぶ いのちの尊さ』に次のような内容が紹介されています。

「私は北海道生まれで、北海道の寺の住職もしています。最近では飛行機というものがたいへん便利になりました、住職と大谷大学での教員と、両方をしております。それで、日ころは寺にいないものですから、たまに帰ったときには、ご門徒の方々のところにお参りさせてもらうのです。ある農家のおじいさんが、七十歳ぐらいのときです。リウマチになって、足が痛くてしかたがない。それで我慢ができないから、病院に入院していたのです。そして、私がお参りに行くという日は、わざわざ病院から帰ってこられて、いっしょに御経をお勤めして、お参りをするのです。お参りが終わったあと、居間でお茶を飲んでおりましたら、〈御院さん、リウマチというのは痛いもので、ほんとうに我慢ができないくらい痛いものだ〉というものですから、〈そうですか。大変ですね〉と相づちをうちましたら、〈御院さんは若いから、わからんだろうけども・・・〉と言うのです。これには私も黙っておれませんで、〈そうかい。死んだら痛くないよ〉と言ったのです。すると、そのおじいちゃんは聞法している人ですから、パンと痛い膝を叩いて、〈あ、そうだったな、忘れておった。足が痛くなるまで命もらったんだものな。もつたいない話だ。忘れておったな〉。そういうふう気づかれた。お念仏をいただいでいない人に、〈死んだら痛くないよ〉などと言ったら、放り出されます。おじいちゃんは、お念仏をいただいでいる人だから、わかったのです。〈そうだったな。足が痛くなるまで、リウマチがいただけるまで、長生きさせてもらったんだな。もつたいないことを言ってしまった。忘れていた〉と言って、口から「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」とお念仏が出た。これが、今をもらって生きている、もらい続けの人

生です。」

「経教は之を喩るに鏡の如し」

（善導大師）

中国の善導大師（六一三〜六八一）がこの様に積られています。日本ではこの善導大師の教えによつて、法然上人は念仏による成仏の信仰を開かれました。

「罪ありと云うことを知りて懺悔すべし。懺悔とは罪を罪と知りて悔い返す意なり」

（西山上人）

「上品の懺悔は五体を地に投げて大山の崩るゝが如くし、遍身に汗を流し、眼より涙をこぼす。中品の懺悔は身心徹倒し、眼より涙を流す。下品の懺悔は自ら所犯を顕して、口に懺悔の文を唱ふるなり」

（西山上人）

「み法聞く身となるまでは、己が心の愚かさを知らず、われこそ善人と思ひ上がっていたけれど、

気づいてみれば恥ずかしい。智恵も力もないくせに、己が力で何もかも出来るやれると思ひ込み、生きているのも、わが力、誰の世話にもならんぞと、力むわが身の体さえ、生まれた時から死ぬるまで、人のお世話になり通し。吐く息、吸う息みな空気、水一滴も、みほとけの恵みなければ得られない。おかげ知らず愚痴小言、わが身勝手を柵にあげ、人の落ち度のあらさがし、よその秘密を聞きたがり、言うなと言えば言いたがる。人が困ればうれしがり、友の成功ねたましい。少しのことを恩にきせ、受けたご恩は忘れがち。見よと言われれば見たがらず、見るなと言われればなお見たい。せよと言われりやいやになる。天のじゃこではないけれど、素直になれば負けたよに、思う心のひねくれを、どうすることも出来ぬ我。ああはずかしや我が心、地獄ゆきとは我がことよ。それを地獄へやるまいと、四十八願手をひろげ、救わにゃおかぬご誓願、弥陀の御恩の尊さを、しらせたまえる祖師知識、ああありがたや南無阿弥陀仏」

(作者不明)

## 注

(1) 貪瞋痴とは三毒煩惱のこと。すなわち貪欲とはむさぼりの欲、瞋恚とはいかりの欲、愚痴とはおろかさの欲である。煩惱とは身心を苦しめ、わずらわす精神作用のことである。無数の煩惱があり、代表的に百八煩惱などが説かれている。

### 第三席 懺悔式と剃度式

「流転三界中恩愛不能断棄恩入無為真實報恩者」  
るてんさんがいちゆうおんないふのうだんきおんにゆうむいしんじつほうおんしや

（三界中に流転し恩愛断つこと能わず恩を棄て無為に入る真實の恩を報ずるものなり）

（『清信士経』）

迷いの世界を三界と言います。欲界・色界・無色界と言う世界です。欲望の世界、物にとらわれる執着心に苛まれる世界、心の悩みで右往左往する世界であります。こういう世界で恩愛を断つことは難しいことです。この恩愛を捨てて、真實の世界に入るのが剃度であります。

「始めも知らぬ昔、身を受けてより已来、常に十悪をもつて人々に加え、父母に孝順ならず、三宝を謗り、恐ろしき、五逆の罪を犯しぬ、この罪の因縁によりて妄想顛倒して、纏い縛られ、はかり知れない迷いの苦を受く。謹んで、懺悔し奉る。願わくは滅除し給え、至心に阿弥陀仏に歸命し奉る」  
このかた じゆうあく(一) こうじゆん せいしん

（『往生礼讃偈』）

例え、悪業（十悪）を為しても、懺悔の思いをもって、阿弥陀仏への心からの誓いをすれば阿弥陀  
仏の慈悲で西方極楽浄土へ往生できます。

「念々称名 常懺悔」

（善導大師）

「発露懺悔とは、正しく言を発して所造の罪を悔ゆる言なり」

「発露懺悔とは、発露は作る所の罪を隠すことなく諸仏菩薩に申すなり」

（西山上人）

心から自分の罪業を隠すことなく振り返り、言葉で表し、あるいは心の中で心から悔い、懺悔する  
ことである。諸仏菩薩への懺悔は身も心も清やかにしていただく身器清浄であり、その上に五重相伝  
会の大法を受けます。

「弥陀心水沐身頂」

（『往生礼讃偈』）

「障罪無量」しやうざいむりやう 「南無阿弥陀仏」

「利劍即是弥陀号、一声称念罪皆除」りけんそくぜみだごう いっしょうしやうしやうねんざいかいじよ

(利劍即ち是れ弥陀号、一声称念すれば罪は皆除く)

(『般舟讚』)

利劍の名号 香空慈芳師<sup>③</sup>

香空慈芳師(一八四九〜一九一七)は近年の高僧であります。嘉永二年(一八四九)三月十八日に和歌山県日高郡上南部村(現、みなべ町)西本庄の中西久七郎の次男として生まれました。法縁にて安政六年(一八五九)九月十五日に十歳にして西牟婁郡中芳養村(現、田辺市中芳養)の泉養寺の慈全師の徒弟となり得度する。明治九年(一八七六)四月二十九日に二十七歳にして海草郡(現、海南市)黒田の明王寺の住職となる。明王寺には略歴の記録が残されている。明治十二年(一八七九)十一月二十五日には粟生光明寺での宗学を終えて、翌年(一八八〇)の三月に泉養寺の住職となる。明治二十六年(一八九三)四月二十五日に愛知県碧海郡(現、岡崎市)中島の檀林崇福寺の特命住職となる。崇福寺は醍醐天皇(八九七〜九三〇)の命により創建される。現今も今川義元から寄進された総門など威風堂々である。特に第八・九・十代住職は徳川家康の徒弟である。慈芳上人は当寺の第四十一代住職であります。立派な位牌も祀られていて、その裏には多額の寄進の記録も刻まれている。その間、宗議会議長を務める。明治三十四年(一九〇一)六月二十五日に西山派総本山圓福寺法主に晋む。

圓福寺の山門には葵の紋がある。大梵鐘が吊された鐘楼もあり、本堂は安永九年（一七八〇）に建立された建物である。当寺には慈芳上人の墓地が祀られている。さらに位牌には同じく多額の寄進の記録がみられる。五輪塔の墓碑には慈芳上人の経歴などが刻まれている。さらに「いやさかの みだのみくにえ かえるらん かりのこのみは ここにのこして」という句も遺されている。明治三十四年（一九〇一）七月二十九日に権大僧正、翌年の明治三十五年（一九〇二）二月二十四日に大僧正を拜命する。明治三十八年（一九〇五）六月に五十六歳にて西山派管長に就任する。明治四十三年（一九一〇）西山派管長の満期の後、愛知県安城市の神光寺に隠居し、静かに念仏の法味を愛樂し、法話・講演等に尽くす。大正四年（一九一五）春に泉養寺に帰られる。『日高郡誌』によるとこの頃より健康優れず、神経痛・胃痛・心臓等の諸病に悩み、大正六年（一九一七）に快気に向かっていたが、十月十七日突如胃腸病にて重体となり、終に十一月十五日午前一時に療養先の名古屋市において生涯を閉じられる。泉養寺にも墓石が祀られている。翌十六日神光寺にて密葬、十二月二十日日本山圓福寺にて表葬儀を営まれた。圓福寺第六十七世になる。法名は大僧正香空慈芳上人蓮月水鏡大和尚である。なお、神光寺にも慈芳上人の功績を讃える大きな碑が建立されている。

慈芳上人の遺詠には次の句がある。

「病ある 身はいずこえか 捨てぬべし 心ばかりは 弥陀の浄土へ」

「人のため かかぐる法の ともしびは おのがやみ路も 照らしこそすれ」



中西 慈芳 大僧正

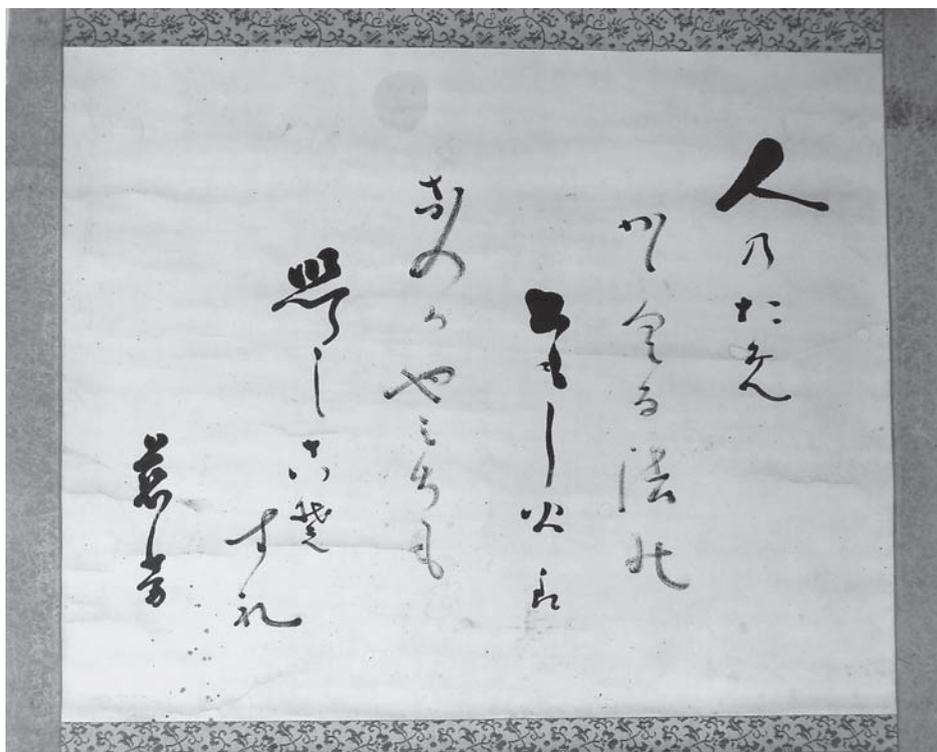


神光寺（愛知県）記念碑



圓福寺（愛知県）墓碑

いやさかの  
弥陀の御国へ  
かえるらん  
かりの此身は  
こゝに残して



人のため  
かかぐる法の  
ともしびは  
おのがやみじも  
照らしこそすれ

總本山圓福寺法主

中西慈芳大僧正真筆

明治四十年五月送與セツク也

南方清如所持

(裏書)

海南市下津町上

妙見山白翁寺所藏

「いやさかの みだのみくにえ かえるらん かりのこのみは ここにのこして」

「上人嘉永二年三月十八

日産栓紀伊日高郡南部

郷西本莊中西家事泉

養寺慈全和上長而諡師

跡明治廿六稔轉檀林崇

福寺全三拾四年晋住本

山次而任宗務管長同四

十三年保齡六十二歳退

職閑涅槃維時大正六年知

愚之有志建焉」

「一切の功德出家と等しきものなし。乃至、出家を讚する言葉、虚空に満つるまで説くも尚尽ることなし。蓋し、出家の大願は、生死解脱の因縁、諸仏出世の本源なり。定んで天神地祇も降臨影向し、弟子の信心を哀愍納受したまう」

（『文殊問経』）

出家は剃髪、仏弟子になる証であります。出家をする、それ以上の功德はありません。過去、たとえばある家族の方が出家すると、先祖代々九族が天に昇る功德あり、どんなに時間をかけても出家の功德は言葉として虚空に満つるも尽くせません。ことに出家の大願は強い因縁（仏との結びつき）がなければなかなか叶わないのであります。そして阿弥陀仏は出家した弟子を守ってくださいされるのです。この度の五重相伝会にも随喜頂いている中国の永山理恵様とは二回目にあつた時に、「先生の弟子になりたい」との申し入れがありました。法縁があつて、私の許で出家得度いたしました。

二年前に、中国の浄空法師を岡山県にお招き致しました。浄空法師は中国の安徽省のご出身で一九四九年、台湾に移られ、仏教の布教をされました。更にシンガポールなどで仏教や念仏を国際的に布教活動されています。しかもただ単に仏教だけではなく、キリスト教・イスラム教・ヒンズー教など様々な宗教主導者と交流されて世界平和の為の活動を続けておられます。又、インターネットや衛星放送で一日四時間の講経を世界の人々に対して発信されています。現在は『無量寿経』の説法をされています。

外国では普通のホテルでも放送されており、私も台湾等に行った機会に視聴することが出来ました。もちろん仏教だけではなく、キリスト教等の他の放送もあります。

そんな中、三年近く前に浄空法師よりマレーシアに一度、来られませんか、と連絡を受けました。私は十数年ほど前から浄空法師との法縁があります。特にこの法縁を結んでいただいたのは、韓国の釈暁鸞師（一〇一三）と言う僧侶でありました。釈暁鸞師がシンガポールに行かれた折に南無阿

弥陀仏（念仏）を世界に布教されている浄空法師の存在を知られました。そこで、「是非、日本にお招きしたらいかがでしょうか」と言うお話を私の師匠である橋本随暢師に連絡がありました。その節には韓国には釈暎鸞師が迎えられることになりました。師匠から、「あなた（中西）は京都にいるから総本山光明寺と相談し、段取りをしなさい」と連絡がありました。結局、韓国と日本でお迎えして法縁を結ぶことになりました。当時の総本山光明寺の管長は松尾全弘猥下でした。まずは私の寺、観世寺にて浄空法師と随従の僧俗五十人ほどを迎えました。その後、総本山光明寺にご案内して、さらに浄土宗宗務総長の水谷幸正師や僧侶も加わられて懇親会を開催して頂きました。それが今から約十数年前のことです、そこからの法縁が続いています。

さて、マレーシアでのお話は、「日本からも衛星放送できる発信基地を作りましょう」との提案でした。そして私は岡山県に出来るその企画のお手伝いをいたしました。設立は丁度、東日本大震災の直後でした。浄空法師はオーストラリアで、「今一番切迫していること」と言う講演を震災直前にされていきます。まさに大震災を予知されておられました。日本に対しては殊の外、心配をくだされ、念仏の信仰を皆に知らせる方法として岡山県に衛星放送の発信基地を作られました。弟子たちは原発事故の恐怖もあって、浄空法師が岡山県に来られることを慰留される実情もありました。一か月の予定でしたが、十日間の講経のために来日されました。そこに来られたのが福岡県の永山理恵様でした。住まいの近くの西方寺の住職である湯川弘玲師と一緒に来られていました。永山様は縁あって、後に、私の京都の観世寺で出家・得度をいたし、随浄と言う法名を授けました。随浄は現在は浄空法師の許

で修行をしています。もつと、日本の為に役に立ちたいとの浄空法師の思いと相まって、私の許での弟子入りを希望しました。浄空法師からの紹介もあり、出家・得度を許したという訳であります。

明日はさらに、中国やチベットからもこの五重相伝会に参加されます。浄空法師の教導と共に念仏の信仰は世界へと広がっているのです。

また、今回、『無量寿経』の注釈を纏めて『無量寿経註釈叢書』七巻を浄空法師編・中西随功監修で出版する運びとなりました。来月には出版記念祝賀会が京都の東本願寺の枳穀邸で開催されます。その『無量寿経註釈叢書』は日本の方々が災害に遭われないようにとの願望が込められています。浄空法師より、その功德を廻らせることの内容の序文の寄稿を頂いています。

「浄土門とは釈尊が〈出世本懐〉とされた妙法であり、『観無量寿経』に〈是心作仏是心是仏〉と



清掃奉仕

説かれるように、横超・円頓の教えである。また、衆生の機根を問わず、凡人・聖人とも行じ易く、しかも仏果に到る最も勝れた道である。『無量寿経』は、浄土法門の最も肝要な經典で、古来より大徳によつて（釈尊が興世のために説かれた正説であり、最も勝れた不可思議な經典であり、十方の諸仏により称賛される真実の説法である。まさに時機相應の真実教であり、本経の念仏法門は円満にして速やかに直ちに仏果に入る教えである）と讃えられている。（中略）しかし、『無量寿経』には五種類の訳本があり異文がみられるがゆえに、この殊勝なる浄土宗の宝典は、中国において千年もの間、学ぶ者が少なく、塵を被ることになった。一方、日本をみれば、僧慧隱が唐から帰国した折、宮中で『無量寿経』を進講して以降、競つて世に弘められ、空前なる盛況がみられた。以降、歴代の註釈家を数多く輩出し、多くの疏や釈が著わされる様は、宝庫とも言えるほどであり、数多くの後学の徒がさらに深く研究したのである。この度、中西随功上人をはじめ、開林法師、劉国霞居士が発心し、日本に古来より伝わる『無量寿経』の註釈の諸著を網羅し、『無量寿経註釈叢書』を刊行する運びとなった。これは、古徳の心血結晶が報われ、今後研究や学習の参考および根拠ともなる実に無量なる大功德である。ご依頼により古讚を借り、序文を綴り、お祝いとさせていただきます。釈浄空謹具」

「剃りたきは 心の中の 乱れ髪 かたちの髪は とにもかくにも」

（古歌）

(1) 十悪とは身・口・意の三業のうちで顕著な悪のことである。すなわち、殺生（生きものを殺す）・偷盗（他人のものを盗む）・邪淫（みだらな異性交遊をする）・妄語（嘘をつくこと）・両舌（二枚舌を使うこと）・悪口（他人の悪口を言うこと）・綺語（染心から発する言葉）・貪欲（むさぼりの欲）・瞋恚（怒りの欲）・愚痴（恨んだり妬んだりの欲）のことである。

(2) 五逆の罪とは殺母（母を殺すこと）・殺父（父を殺すこと）・殺阿羅漢（聖者を殺すこと）・出仏身血（仏の身体を傷つけて出血させること）・破和合僧（教団の和合一致を破壊し、分裂させること）である。この五つは最も重い罪である。

(3) 香空慈芳上人の利剣名号を拝見した経験がある。なお香空慈芳上人の事跡の調査については母親（中西アイ）と西川弘海氏の尽力に負うところ多大である。その成果の一端を紹介している。

## 第四席 四恩

「世間の恩に四恩あり、一つには父母の恩、二つには衆生の恩、三つには国土の恩、四つには三宝の恩、かくの如き四恩は、一切衆生、平等に荷負す」

（『心地観経』）

釈尊はこの四つの恩はすべての人が等しく、平等に受けていると説かれています。

「飲水思源」（水を飲んで源を思う）

「流れを汲む者は、その水源を思い、花を愛する者は、その根に培う」

（古訓）

水流の流れを受けている者はその源に思いをなし、源泉に感謝する。また綺麗な花を見ては手入れをされた方への恩を忘れない。

「生かされて 生きるや今日の この命 天地の恩 限りなき恩」

(平澤 興)

京都大学の総長をされた平澤興先生は、今日ある命、天地もすべて限りなき、ありがたい恩をいただいていると謳われている。

## 一、父母の恩

「もし子遠くに行かば、帰りてその顔見るまで、出ても入りてもこれを想い、寝ても覚めてもこれを想う。おのれ命ある間は子に代わらんことを想い、おのれ死に去りて後までも、子の行く末を護らんことを誓う」

(『父母恩重経』)

### ● 『父母恩重経』

『仏説父母恩重経』には、父母から受けるご恩について説かれている。私達はこの世に命を受けている親の大神を十種に分けて具体的に教えている。そして、その恩に報いるために仏法の実践を促している。この経典は日本には奈良時代に伝わり、請来され東大寺の正倉院の蔵に収まっています。具

体的に『仏説父母恩重經』には、次の十の恩を説かれています。

- 一、懐胎守護の恩かいたいしゆじゆ 子を体内に受けて十ヶ月間苦悩の休む時がないために、ほかの何も欲しがる心も生まれず、ただ一心に安産ができる事を思うのみである。
- 二、臨生受苦の恩りんしよつじゆく 出産時には、陣痛による苦しみは耐え難いものである。父も心配から身や心がおののき恐れ、祖父母や親族の人々も皆心を痛めて母と子の身を案ずるのである。
- 三、生子忘憂の恩しようしぼうゆう 出産後は父母の喜びは限りない。それまでの苦しみを忘れ母は子が声を上げて泣き出した時に、自分も初めて生まれてきたような喜びに染まるのである。
- 四、乳哺養育の恩にゆうほよういく 花のような顔色だった母親が子供に乳をやり、育てる中で数年間で憔悴しきつてしまう。 〓 四番目以降からは生まれて以降に受ける恩です。
- 五、廻乾就湿の恩かいかんしゆうじつ 水のような霜の夜も、氷のような雪の暁にも、乾いたところに子を寝かせ、湿つたところに自ら寝る。
- 六、洗濯不浄の恩せんかんふじよう 子がふところや衣類に尿するも、自らの手にて洗いすぎ、臭穢をいとわれない。
- 七、嚙苦吐甘の恩えんくとかん 親は不味いものを食べ、美味しいものは子に食べさせる。
- 八、為造悪業の恩いどうあくごう 子供のためには、やむを得ず、悪業をし、悪しきところへ落ちるのも甘んじる。
- 九、遠行憶念の恩おんぎまよわくねん 子供が遠くへ行ったら、帰ってくるまで四六時中、心配する。
- 十、究意憐愍の恩くきようれんみん 自分が生きている間は、子の苦しみを一身に引き受けようとし、死後も子を護りたいと願う。寝ても起きも、子を思う親の気持ちは深く、死後までも子を護りたいと願う。

●竹下哲『いのちに目覚める』親の足を洗う

竹下哲氏の『いのちに目覚める』には次の内容が紹介されています。

ある大手の会社の人社試験での、第一次試験である筆記試験後の第二次試験の口答試験での話です。一所懸命に勉強し、一次試験に合格した一人の青年が面接室に入ってきました。正面に座っておられた社長さんが「君は生まれてから今までに親の身体を洗ってあげたことがあるかね？」と言う質問だったので。経済学も社会学の質問も出ない。その青年はびっくりして「按摩ぐらいはしてあげたことはありますが、親の身体を洗ってやったことはありません」と答えました。すると社長さんが言いました「君はお父さんを早く亡くし、母一人、子一人だね」「ハイ、そうです」「それでは今日帰ったらお母さんのどこでもよいから洗ってあげなさい。その上で明日また面接する、今日はもう帰りました」と言われました。その青年はブーブー言って家に帰りました。だがどうしても、あの会社に入りたい。その為にはおふくろのどこを洗えばよいのかと思っただけです。青年の母親は反物の行商をして歩いているんです。そうだ、足が汚れているらう。足なら簡単に洗えば済む。足を洗うために大きなタライにお湯をいっぱい沸かし、母親が帰るのを待った。やがて母親が帰ってきました。「お母さんお帰りなさい。今日は僕がお母さんの足を洗ってあげるよ」と言っただけです。ところが平素が親不孝息子で、親をバカの、ほうけのと馬鹿にしている。その親不孝息子が急にそんなことを言うもんですから、母親がびっくりしたんです。そして「イヤ、自分の足は自分で洗うわよ」と言っただけです。そしたら息子が「今日、面接で会社に行ったところがね、変な社長がおあってね、お母さんの身体

を洗えと言うんだ。だからどうしても洗わんといかんのだ。すまんけど、洗わせてくれ」と頼んだんだそうです。母親は「そう、それじゃしょうがないわね」と言ってお尻に手を下ろし、息子の汲んでくれたタライのお湯の中に足をつけたんです。息子は母親の足を洗おうと思い、タライの向こう側にしゃがんで、何気なく母親の足を握った。母親の足は女の足だから、細くて柔らかい足だと思っておったところが、そうではなかった。石のように硬く、ゴツゴツした足だったそうです。そのゴツゴツした足を握った、その青年の胸に熱いものがこみ上げてきて、母親の足を握ったまま、オイオイと声を上げて泣いたそうです。男泣きに泣いたそうです。

翌日、青年は会社に行き社長さんに会いました。「社長さん、私は小学校、中学校、高校、大学と出していたきましたが、だれ一人、親の恩と言う事を教えてくれませんでした。この度、社長さんにお目にかかって、初めて親の恩と言う事をわからせていただきました。ありがとうございます。」この会社に入社したいのですが、例え採用されなくても、生涯、母親を大事にしていこうと思います」と、こう言ったそうです。これで初めて、その青年が人間になったんですね。

人間の誕生は二回あると思います。一回は言うまでもなく母親のおなかからオギャーと生まれることです。それは生物学的には人間であっても、本当の人間ではありません。第二回目の誕生とは母親の細かいしゃな足が石の様にゴツゴツとなった苦勞の犠牲の上に青年の今日があると言うことに目覚めることなんです。無量寿・無量光の世界に目覚めることです。

## ●森友トシ子「遺言の歌」

私は企業の電機会社を退職して総本山光明寺に隨身学生として入山しました。当時の管長は学僧の森英純猊下でありました。その学僧としての威風に心惹かれることが多くありました。早朝の勤行と作務を終えて、宗門大学である西山短期大学（現、京都西山短期大学）で修学し、夕刻には与えられた直檀（本山の直接の檀家）に月参りする。

昭和四十八年（一九七三）二月十八日に直檀の高橋家にお参りした。常の如くに勤行を終えました。その日は週末であり家族揃ってお参りされた。勤行後、茶の接待をうけながらの歓談の時に、主人が「先日、読売新聞にこんな記事が紹介されていました。読んでもらおうと思いましたが」と渡されました。そこには、「遺言の歌」とタイトルされて、森友トシ子様のごことが報道されていました。森友様は二十八歳にして幼子三人を遺して胃癌で亡くなられた。その臨終前に書き置いた文章であります。

「一、人生二十八年の旅路をここに終えます。皆さんお世話になりました。夫と子等よさようなら。

二、母さんほんとうに有難う。私の心の愚さに、わがままばかり言い張って、あなたを泣かせてきましたね。

三、私の宿業抱きしめ、み親もともに泣きますと聞かせてもらったその日から心の暗は晴れました。

四、ようこそ教えて下された。泣く泣く三途に沈む身が無碍の白道一筋にみ親とともに参ります。

五、一日ごとに腫れてくる痛みもつこの腹をなでては泣いたこの口に今では念仏たえません。

六、私が逝ったそのあとで明け暮れ三人の幼な子が母を尋ねて泣くでせう。思は心が残ります。

七、お浄土さまから母さんはじつと守っておりますよ。世間の人から愛されて生きぬくように頼みます。

八、幼い三人の子供等よ、母さんこいしと思うなら、み仏さまに掌を合せ南無阿弥陀仏と称えてね。

九、落葉を送る風すみてみ空にかかる月さえも雲ひとつなくさえわたり西え西えと急ぎます。

十、私も行きます西の国、輝く光りのお浄土へ、それでは皆さんさようなら。南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏」

「法然上人 張子の御影」

総本山光明寺の御影堂にお祀りされている張子の御影は、法然上人が比叡山で出家されて以来、母親から送られた手紙を七十四歳まで肌身離さず保持されてきました。その手紙で法然上人が張って作られたものであります。母親の子どもに対する願いや愛情が込められた像であります。法然上人の母親の思いが偲ばれます。

## 二、衆生の恩（社会の恩）

「一切衆生悉有仏性」

「吐く息、吸う息、みな空気、水一滴もみほとけの恵みなければ得られない」

「おかげさま」「ご馳走さま」

食事をいただくにつけて、おかげさまとご馳走さまの気持ち大切です。この感謝の気持ちを持って、社会への恩を報謝いたしたいものです。

私がここで今、お話をさせて頂けるのも皆様が聞いてくださるお陰であります。お聴き頂けなけ

ればお話もさせて頂けないのです。

### 上田香代子様の手紙

わが家の中学生は二年にもなるのに、食事のマナーがはなはだよろしくない。とくに毎日の弁当箱にはきまって、ごはんが五、六粒、多いときには二十粒くらいもおみやげとして食べ残して帰る。きれいにたべるように、大して時間がかかることではなし、行儀が悪いからとさんざんいつてきかせるのに、とんとききめがない。そこで窮余の一策として手紙を書いて弁当包みにしのばせた。

きょうはどんな顔で食べるかしら、また食べ残しがあるのではないかしらと案じながら、「陽ちゃん、毎日のごはんについて考えたことがありますか。たった一粒の米ぐらいと思っても、それが口にはいるまでには大きな自然の恵みである太陽の光や水、空気、土などに近代的な肥料、農業など、そしておとうさんや私などの労苦と一年という長い時間を費やしているのです。どうぞ、これからはもうごはん粒を残さないでください。ただ行儀が悪いだけでなく、一粒のお米でも、もつたいないという気持ちをお忘れしないでほしいのです」

(朝日新聞「ひととき欄」、福井県武生市 上田香代子 三十二歳)

上田香代子様は子どもに弁当を通して、各々のお米になるまでの水・太陽・空気・土、そして農家

の方々の努力と働きがあつてこそとお陰の教育をされています。この世に存在する全ての命は輝いています。その命の尊さや大切さをわかつてほしいとの教えであります。そして、社会の恩に感謝して欲しいのです。

●心臓「みずからの腕を枕に眠る夜、ふかくさみしく血の音ひびく」(金沢早苗)

私が嘗て豊中市の叔母の家に行った時のことです。叔母は短歌が趣味でした。ある時に短歌の本の中に大変感動した良い作品があると紹介してくれました。それは金沢早苗様の、「みずからの腕を枕に眠る夜、ふかくさみしく血の音響く」でした。

まさに生命についての奥深い世界を詠われています。横になっていると心臓の鼓動が聞こえてくる。その鼓動に感動されて詠まれています。

私の生命を支えてくれている心臓は一分間に約七十二回程度、一年間に四千万回、六十歳で二十四億回も鼓動、八十歳で三十二億回にもなります。働き通しに働き続けています。私の生命を支えるためには心臓だけでなく、口も鼻も耳も眼も、腎臓も肝臓も全ての働きのお陰のなかに生かされています。刻々ときざまれていく無常の中を生きている生命、保ちがたく消えやすき生命を生かされていることを実感せしめられる素晴らしい短歌であります。

感謝の気持ちを持たねばいけません。私たちは毎日、気づかなくても大いなる生命のお陰で生かされているのです。ありがたい事であります。この感謝を南無阿弥陀仏という言葉の一言で言い表せま

す。阿弥陀仏は無量寿であり限りなき生命のことであり、南無とは感謝のことで、「ありがとう」という意です。

### ●東海さだお「人体の言い分」

東海さだお氏の著書『アイウエオの陰謀』の中に「人体の言い分」と言う文章がありますので紹介します。

「心臓 申しあげます。はっきり言って、わたしら、もう、やっておられません。つくづくいやになった。わたしらの仕事は時世に合っていない。なにがですって？。だってそうでしょう。わたしら休暇がとれない。一度働き始めたら、死ぬまで休暇がとれない。一度たりともとれない。何十年間、ただの一回も休暇なし。百年間休暇なしって人、わたし知っています。休暇どころじゃない。ほんのちよつとした休憩さえとれない。へほんの一分でもいいから休憩したい。こんなささやかな願いさえ叶えられないんです。ちよつと休憩したら、もう大騒ぎです。ほんの十秒ほど、ほんのちよつと息抜きしただけでも、もう、ピーポーだの、遺言だのと大騒ぎ。働き始めたら何十年間休暇なし、休憩なし、手抜き、息抜き一切なし、いくらなんでもひどすぎるんじゃないですか。システムのにおかしいと思う。しかもですよ、作業は常に一定でなければならぬ。ほんのちよつとの違いも許されない精密な仕事なんです。速すぎてもいけないし、遅すぎてもいけな

い。圧力も常に一定。ほんのちよつと気を抜いて、ほんのちよつと圧力が変わっただけでも大騒ぎ。降圧だ、昇圧だ、とウエから言ってくるんです。ですから〈一定〉ということにはギリギリ神経つかってます。一分間に七十回、このことに神経すりへらしています。なのですよ、突然、百にしてくれ、百二十にしてくれ、なんて言うてくることがあるんです。ウエのほうがやることで、よくわかんないんですが、ジョギングがどうのだから、仕送りをどんどん早めてくれとか言ってくるんです。何の相談もなしにいきなりです。わたしらハアハアいつて頑張る。ヘトヘトになるまで頑張る。だが、手当は一切ありません。〈ゴクローウ〉の一言さえもありません。それどころか、なるべく早く、七十に戻してくれ、なんて言うてくるんです。ええ、他の連中はけっこう休んでますよ。胃なんか、けっこう休みがある。午前中の十時ごろから十二時まで、とか、夕方とか、あ、夜中なんか休憩もいとこなんじゃないですか。スイッチ切つて寝てる。わたしらにもスイッチがあつて、夜中は切つて休めるということになつたらどんなにいいか。〈一度、ストライキやつてやろうか〉。なんて、仲間うちでよく話しますが、ストライキすると、自分も死んじゃうわけで、そこがわたしらの泣きどころつてわけです。どこまでいけるか、とにかくいけるところまでいってみるつもりです。」

### 三、国土の恩

「ふるさとの 山に向ひて 言ふことなし ふるさとの山は ありがたきかな」

(石川啄木「一握の砂」)

#### ●北海道へのヒッチハイクの旅

私は十六歳の夏休みに、友人と二人で十七日間かけて、ヒッチハイクで北海道へ旅したことがあります。両親や家族の心配を背にして、暑さ厳しいなかを出發しました。もとより自動車に便乗させていただく行き当たりばつたりの旅であります。野宿のためのシーツ一枚と飯盒を持参しました。予想通り初体験の多い旅でありました。その間、たくさんの人たちとの一期一会の出逢いがあり、人情にも触れられた。新婚旅行の熱々のお二人様、お邪魔しました。「あなたたち悪い人と違いますか」と言われたが、返事する前に乗り込んでいて奥様ご免なさい。忙しい中をわざわざ網走刑務所へ案内して下された親切なおじ様ありがとうございます。「あれが高村光太郎の安達太良山だ」と運転中に指さしてくれたトラックの運転手さん、気をつけて。いろいろな方との御縁とお世話を受けた旅でありました。今から想えば懐かしいが、当時は少々必死でありました。なかなか車が止まってくれないで立ち竦んでしまったりする時の惨めさも味わった。だが、その旅を支えてくれたのは、いつかは家に帰れるんだという確信でありました。たとえば、星空の下に広げたシーツが朝方には露で湿って冷たくて寝れな

くても、その確信に支えられて目が覚めた。まさに阿弥陀仏の極楽浄土は私たちの人生の旅を支えて下さる大安心の世界であるように思える。

ここで古賀政男作曲、西条八十作詞の「誰か故郷を思わざる」を合唱しましょう。

「誰か故郷を想わざる　西条八十　作詞

古賀政男　作曲

1　花摘む野辺に　日は落ちて

みんなで肩を　組みながら

唄をうたった　帰りみち

幼馴染みの　あの友この友

あゝ誰か故郷を想わざる

2　ひとりの姉が　嫁ぐ夜に

小川の岸で　さみしさに

泣いた涙の　なつかしさ

幼馴染みの　あの山この川

あゝ誰か故郷を想わざる

3 都に雨の 降る夜は

涙に胸も しめりがち

遠く呼ぶのは 誰の声

幼馴染みの あゝの夢この夢

あゝ誰か故郷を想わざる

#### 四、三宝の恩

●小川一乗『お浄土さまはいのちのふるさと』

「篤く三宝を敬へ、三宝とは、仏と法と僧なり。則ち四生の終帰万国の極宗なり。何れの世、何れの人か、この法を貴ばざらん、人、尤悪しきもの鮮し、能く教うれば従う。其れ三宝に帰りまつらば何を以てか、枉れるを直さん」

(聖徳太子「十七条憲法」)

その昔から仏・法・僧の三宝の大切さを教えています。これによって政治も、また、人々も正しく生きていく道が出来ているのです。

一、仏宝 Buddha 仏陀（ブツダ） 覚者<sup>かくしや</sup> 目覚めたる人

二、法宝 Dhamma 達磨（ダルマ） 真理 道理

「三法印

一、諸行無常<sup>しよぎやうむじやう</sup>

二、諸法無我<sup>しよほうむが</sup>

三、涅槃寂静<sup>ねはんじやくじやう</sup>」

三、僧宝 Sangha 僧伽<sup>そんがや</sup>（サンガ） 法を学び仏を目指す人

●同窓会「それがあなたの宝だよ」

私は二十年ぶりの中学校の同窓会のことを思い出します。郷里の同窓会会場に行くとはとんだの同窓生が集まっていました。名前の浮かんでくる者、イメージすら浮かんでこない程の変身をした者

等々、又お世辞にもきれいとは言えない方言ではあるが、その響きにも懐かしさを覚えるのであった。恩師の先生は少々遅く見えられるとのことでありました。やがて先生が見えられた。「先生ご無沙汰いたしております」「いやあ、中西君、元気でやっているか、君は本山の学校に行っているそうだね」と申された後、眼を輝かせて、「私は今日まで長年教師として歩んできたが、この正月ほど教師としての喜び、あるべき姿を感じたことがない」とおっしゃられました。

実はこの正月に三十年ぶりに教え子から年賀状を頂いたことでもあります。先生は戦後の社会混乱期に教壇に立たれた。その頃の生徒には勉強の他にいろいろな作業が課せられていた。

ある真夏の日、炎天下の運動場で草取り作業があった。生徒たちは一斉に散らばったが、たいいていの生徒は木陰の涼しい場所に集まっていた。猛暑の中では涼しい処を求めるのは当然ではあるのだが、ただ一人の女生徒が運動場の真ん中で、黙々と作業をしていた。先生は心を打たれ、引きつけられるようにその女生徒の側に行かれました。先生は「私は忘れていたのだが」と言われて、その折に一言声をかけたのである。「それがあなたの宝だよ」と。その言葉、一言が女生徒の生涯の支えとなったのであります。彼女の年賀状には、「お陰で苦しい時、悲しい時に、先生の一言を思い出して頑張り、今は幸せです」と書かれてあったのだそうです。最高の喜びにあふれる恩師に出会えて、私もうれしくなりました。

人のために働く、その方を菩薩と申します。少しでも他人の役に立つことに努めて菩薩の生活をす。今回の五重相伝会では菩薩になっていただくのが僧宝であります。

## 第五席 五戒

「衆生受仏戒、即入諸仏位、位同大覚已、真是諸仏子」  
(衆生、仏戒を受くれば、即ち諸仏の位に入り、位、大覚に同うし已れば、真に是れ諸仏の子なり)

(『菩薩戒經』)

受者は五戒を受けられて、即ち仏の位になることが出来ます。それより先は、生き菩薩(1)になられる  
と云うことでもあります。それによって戒体発得するのです。

熊谷直実

山中伸弥教授 i P S 細胞

戒法

三聚淨戒

一、

摂律儀戒

止悪

二、

摂善法戒

修善

三、

饒益有情戒

利生

一、不殺生戒ふせつじょうがい（生命あるものをことさらに殺すことなかるべし）

●東井義男「目がさめてみたら」

「目がさめてみたら

目がさめてみたら生きていた

死なずに生きていた

生きるためのいっさいの努力をなげすてて

眠りこけていたわたしであったのに

目がさめてみたら生きていた

劫初以来一度もなかった

まっさらな朝のどまん中に生きていた

いや生かされていた」

東井義雄師の言葉にみられる気持ちで目が覚めたらどんなに素晴らしいことであろう。こんな感動で一日を暮らせたなら喜び極まりないことであろう。東井義男師は兵庫県で小学校の先生をされ、又、深い念仏信仰をお持ちの浄土真宗の僧侶であります。生前は癌を患っていましたが、信仰により病氣

の苦しみを超えられていました。私は東井義男師の「目がさめてみたら」という言葉を味わいながら起きています。

釈尊は『法句経』に次のように説かれています。

「目ざめる

眠りえぬものに夜はながく

つかれたるものに五里の路はながし

正法を知るなきおろかの者に

生死の輪廻はながからん」

何か気がかりがあると、なかなか寝付かれない。疲れていると短い道のりも遠く感ずる。全ての物事は私の心の受け止めによるのであります。

●東井義雄『いのちとのふれあい』口蓋垂

又、東井師は『いのちとのふれあい』という著書のなかで次のようなことを紹介されています。

「私は高等科を担当していたが、三学期の終り、授業のすべてを終った私は「これでこの学年

の勉強は全部終わったが、何か質問はないか？」といったとき、北村君という子どもが挙手をした。私はギクツとした。北村君は母一人子一人の貧しい家庭の子どもで、小学校三年のときから、毎朝三時半に起床、豊岡の町を新聞配達して廻り、帰って朝の勉強、それから朝食をとって学校にやってくるという子どもであった。学校が終るととんで帰って夕刊配達をやっている北村君であった。お母さんがきびしい人で「お前の本職は勉強だ、新聞配達をやっているからといって授業中にいねむりをするようなら、新聞配達なんかやめてしまえ」といつているようなお母さんであった。だから、夏の暑い午後なんか、子どもたちの中にいねむりする者もあったが、そんなときも北村君は、まっすぐな姿勢とにらみつけるような目の玉で授業を受ける彼であった。その彼が「ハイッ」と鋭い声で挙手するのであるから、私もギクツとせずにはおれなかったのである。指名すると彼は言った。「先生、あアと口をあけると、のどの奥にペロンと垂れたぶさいくな形のものが見えてきます。あれはどういうはたらきをしているものですか？」と。

「北村君、すまんがあれの役目を知らんわい、きょう帰って調べてみるから明日まで答を待ってくれんかい」としか、私には言い様がなかった。彼が尋ねているものがあることは知っているが、それがどういう名前のものであり、どういうはたらきをしているものであるかを、私は全然知らなかったからである。

その夜、人体に関する参考書のありったけを引っ張り出してみて、あののどの奥のペロペロが「口蓋垂」というものであること、のどの奥の岐れ道のところで、食物が気管の方へ行かないよう、

食物をのみこむときには、気管の入口をふさいでくれるはたらきをしていることがわかったとき、私は頭のあがらぬ感動のとりこになってしまった。それが、どんなはたらきをしているか知らなくらいだから、すまないなあと思ったこともない。ありがとうと礼をいったこともない。それどころか、俺が生きてやっているのだというような態度で生きてきたこの私のために、私が母親の乳をのみはじめたそのときから、はたらきどうしにはたらきつづけてきてくれたはたらきがあったということに目が覚めたのであった。気がついてみると、それは「口蓋垂」だけでなかった。目も耳も鼻も口も、手も脚も、心臓も、胃も腸も・・・私のいのちにかかわる呼吸さえもが、私のためにはたらき続けてくれているという事実が目覚めさせられたのである。生かされてここまできた私を知らされたのである。」

「生命を大切に作る人間となろう  
たった一つの

とうといいのち

ほとけさまはいのちのあらわれ、

草も木も鳥も魚も

みんないのちを

大切に生きています。

きびしい自然の中に

生き抜くいのち、

力づよいいのち、

不思議ないのち、

このいのちの尊さを

ほとけさまが教えて下さる。

いのちを大切に作る人間となろう。」

（「わたしたちのねがい」―仏教の人間像― 全国青少年教化協議会）

### ●鳥インフルエンザ発生時の体験

命の尊さと言う事で、私の経験したことがあります。平成十六年の鳥インフルエンザ発生時の体験です。それは改めて宗教による情操教育の大切さを実感させられた時でもありました。幸いにして京都西山短期大学は仏教の理念により教育をしています。たまたま、担当の浄土三部経の授業で餓鬼の話題に及んだ。それが発端となり、過日に報道された鳥インフルエンザで埋葬された鳥の生命についての話題に展開した。ある学生が授業だけでなく、現地で供養をしたいと申し出た。この機会を逸すべきでないと学内で協議して、現地での施餓鬼法要が勤められた。実は準備や式次第は学友会が主体となり企画され、総本山の隨身学生たちにより法要が勤められた。その表白文ひょうびやくもんには、

「いのちをたいせつにする人間となろう

たった一つの

とうといいのち

ほとけさまはいのちのあらわれ

草も、木も、鳥も、魚も

みんないのちを

たいせつにいきている

きびしいしぜんのなかに

いきぬくいのち

ちからづよいのち

ふしぎないのち

このいのちのとうとさを

ほとけさまがおしえてくださる

いのちをたいせつにする人間となろう」

とあり、鳥に対する心からの懺悔をもって共々に合掌し念仏を称えられた。まことに尊いひと時を共有できた。以下に当日参加した学生の声を紹介いたします。

「去る六月三日、京都西山短期大学の諸先生方と共に、私たち学生総勢四十七人で京都府立丹波自然運動公園へ鳥供養へ行きました。中西随功先生の御導師のもと、二十二万羽の鶏達へのおつとめをいたしました。澄み切った青空に小鳥たちの声が響く中、そこには巨大な赤土の盛り上げが鈍色のフェンスの向こうにありました。つい数か月前、この場所が凄まじい状況であったことが夢の中の出来事であったかのように穏やかな時間が流れています。こんなにも静かな時間の中で、間違いなくこの場所で一度に二十二万の命が消えました。不意に起こった出来事で、はかなく命を失った鳥たちに、私達人間の命を重ねて思い、胸にこみ上げるものを感じました。生を受けて、死に向かう事は生きる者すべてに同じ。沢山の命の繋がりに支えられ生かされている私達は、その大切なことを、日常の中に忘れ、己の命が己だけのものであるような錯覚に陥りがちです。脈々と流れる命の継がりの中で、私の命も何かに誰かに継げている事が出来ているのかと思うと、心もとない答えが私の中をさまようばかりです。赤土の塚を前に、命に今一度向き合おう、ごまかすことなく考えてゆこうと決心しました。最後におつとめの中で、皆で読んだ、坂村真民さんの詩の一節を寄せて合掌の心とさせて頂きます。「二度とない人生だから 一輪の花にも無限の愛をそそいでゆこう 一羽の鳥の声にも 無心の耳を かたむけてゆこう」

(京都西山短期大学一回生・松本真波)

二、不偷盜戒（与えられざるものを手にすることなかるべし）

他人の所有物

時間の約束

三、不邪淫戒（道ならざる愛欲を犯すことなかるべし）

四、不妄語戒（いつわりの言葉を口にする事なかるべし）

「口は禍の門」

「三業清浄和讃（作者不詳）」

一人一人の慎みは、数々あれぞその中に、いつも忘れてならぬのは、口を慎むことなるぞ。口禍の門にして、舌はわが身を切る刃、うそを平気で並べるは、盗みの元手をつくりなり、秘密を言うてもらすのは、火つけの罪と思ふべし、腹立ち声でも言うは、炎を吐き出す如くなり、二枚舌をば使うのは、二本の刃を持つごとし、家に波風起るのは、言葉が先で手が次で、言葉の上からつかみあい、ついには命を失うぞ、口と鼻とはとなり合い、行儀の悪いお口さん、となり

の鼻を見習うて、少しは静かになさいませ、人と交わるその時は、言葉少なくていいに、なるべく角かどの立たぬよう、優しく出るがりこうもの、しゃべる口にも誓わせて、第一自慢のお話を、第二に人の悪口は、口がさけても言わぬこと、まことに我等のこの口は、なむ阿弥陀仏の親さまの、出入りまします門なれば、戸口とぐちのしまりを忘れまい、世間話を言う口で尊いお慈悲の数々を、となえましようぞもるともに、南無阿弥陀仏阿弥陀仏」

### 三業

- |                          |   |    |
|--------------------------|---|----|
| 一、身業 <small>しんごう</small> | 殺生・偷盜・邪淫 <small>せつしよう ちゆうとう じやいん</small>    | 身三 |
| 二、口業 <small>くごう</small>  | 妄語・綺語・悪口・両舌 <small>もうご きご あつく りやうぜつ</small> | 口四 |
| 三、意業 <small>いごう</small>  | 貪欲・瞋恚・愚痴                                    | 意三 |

### 十善と十悪

### 三業清浄による十善の実現

五、不飲酒戒（酒におぼれて、生業を乱すことなかるべし）

「花の春 もみぢの秋の 盃も ほどほどにこそ くま、ほしけれ」

（照憲皇太后）

「人、酒を飲む（主体性を持つて）

酒、酒を飲む（過ぎたる姿）

酒、人を飲む（自滅する姿）」

酒は起罪の因縁、衆病の門なり。

「仏子よ、不殺生戒・不偷盜戒・不邪淫戒・不妄語戒・不飲酒戒は、諸仏の護持するところ、曩祖の伝来するところ、我今汝達（なんだち）に授く、汝達、今身（こんじん）より未来際（みらいさい）を尽すまで、その中間（ちゆうげん）に於いて、犯すことを得ざれ、能く持つや、否や」 ↓ 「能く持つ」

（第一羯磨）

（第二羯磨）

（第三羯磨）

「信あれば戒体発得し、信なければ、戒体発得せず」

(妙樂大師湛然)

「一得永不失」

「わが胸の奥にまします み仏を 朝な夕なに 拝がみまつる」

(江部鴨村)

「金丁の文」

一つ、当流相承の旨を心腑に銘じ永く忘るべからざること。  
二つ、相承の旨趣は未相伝の輩に対して猥りに語るべからざること。  
三つ、安心起行の旨趣永く護持して中止すべからざること。

右の条々堅く相守るべきものなり。」

## 注

(1) 生き菩薩とは戒体発得の人をいう。

## 第六席 初重

「初重 安心起行作業之口訣」  
あんじんぎぎようさこうのくけつ(一)

安心 至誠心・深心・廻向発願心  
しじょうしん じんしん えこうほつがんしん

三心  
さんじん

起行 南無阿弥陀仏  
なんむあみだぶつ

作業 恭敬修・無余修・無間修・長時修  
くぎようしゅう むよしゅう むけんしゅう ちようじしゅう

四修  
ししゅう

作法受得  
さほうじゆとく

「物を受けるには心をもつてせよ、法を受けるには身をもつてせよ」

安心 「安心安堵の義」、 「安住安置の義」  
あんしんあんど あんじゆうあんち

どこに心を安定するか ↓ 阿弥陀仏に全てを打ちまかせる心

信仰確立 南無（阿弥陀仏への帰命）の一心 生死一大事の解決  
きみんよう しじゆうじ

●朝日俊彦『あなたは笑って大往生できますか』

朝日俊彦医師の『あなたは笑って大往生できますか』という著書で次のように紹介しています。

「医学も多方面にわたって研究されています。昔の医者には「治す」ということに全力を挙げていました。ですから、僕らも医者になったところは、「とにかく患者さんを治さなければなりません。治すのが医者の仕事だ。治らないで死ぬのは医者の力不足だ」と教えられました。だから、患者さんが亡くなったときにはご遺族の方に「力が及びませんでした」と申し上げていました。「薬石効無く」といいますね。それはとんでもない勘違いなのです。なぜかというところ、人間は必ず死ぬのです。死ななかつたら、逆に困りますよ。そこそこで死ぬので、死ぬことは医学の敗北ではなく、自然現象です。医者にすれば、患者さんを治すことは使命であり、「治さないといけない、頑張らないといけない」と考えていますと、常に負けてしまいます。どんなに手を尽くしても、患者さんはいつかは死んでしまうわけですから・・・。逆転の発想で、どうやったらうまく死ぬるか、気持ちよく患者さんに死んでもらうかということを考えれば、連戦連勝になってくるわけです。患者さんが「先生、お先に」というように、気持ち良くお見送りができるようになりますと、必勝無敗です。そういう点で考え方を変えるということも必要になります。死にそんな患者さんをお世話させていただく終末期医療の中で、このようなことが分かってきました。例えば、八十歳で亡くなる方が、七十九歳までは良い人生が送れた。ところが最後の一年がぱっとしなかったら、息を引き取る時に「俺の人生はつまらなかった」と思うのだそうです。逆に七十九歳まで全然ぱっとしなかったのに、最後の一年がそこそ良かったら

「俺は良い人生が送れた」と思つて息を引き取れるのだそうです。つまり終わりが大切なのです。これは人生だけに限ったことでなく、様々なことと言えます。野球でも七回まで勝っていたのに、最終回で逆転されて負けたらつまらないわけです。勝つた方にしてみれば、七回までは良くなかったが九回で逆転できたら大喜びです。このように、終わりはとても大切ですから、皆さんも終わりを良くしていくように考えることが大事です。そうすると、多くの方がこのように言われます、「老後に不安があるのだ」と。老後の不安で最大のものは寝たきりや認知症です。寝たきりの患者さんはとても多いのですが、皆さんが若い頃からきちんと正しい考えを持っていけば、そんなに寝たきりにはならないと思います。なぜかというところ、寝たきりになった方が若い頃から「わしは長くは寝たきりにならないんだ。そこそこに家族に迷惑をかけずに逝きたいんだ」と思っているなら、寝たきりになった頃から、食事を減らさなければいけないでしょう。三食きちんと食べたなら、いつまでも生きます。だから、最初の一カ月は愛想で三食食べるとしても、やがて二食になり、一食になり、三カ月も経ったら一日飛ばしに食事をしていけば、そんなに長くは生きられません。だんだん寒くなって冬になりましたら、暖かい格好をしてはいけません。寒い日に薄着をさせてもらい、車椅子で散歩をすれば、ちゃんと肺炎になつて死ねますからね・・・。そういうった対策を講じずに寝たきりで長く患つて「つらい、つらい」と言うのは、工夫が足りないのです。うまく死ぬる対策を練つておくことも大事なことです。コロッと逝けますから。多くの人が言います。「先生、どうしたらコロッと逝けますか?」。コロッと逝くに

は、血圧は「高め安定」です。「高め安定」を図るためには、辛いものに馴染むことも大事ですよ。ところが世間では、歳をとったら薄味にしなればと言うんですね。水臭いものばかり食べて死んだら寂しいですよ。それより塩コショウを効かせながら美味しくいただいて、血圧も高くなつて、寿命が来たら、コロッと逝けます。死なないようにするのはなく、どうやってうまく死ぬか。しかも、自分の人生をよりよく生きていくかを考えることが大事です。年配者で、「することがなくなつた」と言う人がいます。そうなたった時には、どうやったら、うまく死ぬかを考えるように方向転換しないといけない。はた迷惑になつては、元も子もありません。この辺りはなかなか難しい問題です。（中略）幸せな人生を送れて、最後に「ああ、私は良い人生を送れた。幸せだった。本当に良かった」という気持ちにならないと、「笑つて大往生」というのは難しいのです。皆さんはこれから歳をとるわけですから、どういう風に歳を重ねるのがカギになります。「歳はとりたくない。歳をとつたらつまらない」ということではなく、幸せな歳のとり方が非常に大事だと思います。（中略）例えば、日本人に人気があるのが「ガン」という病気です。日本人の三人に一人がガンで亡くなっています。「ガンになりたくない」と思つていても、ある時、身体の調子が悪くなつて病院で診察してもらつたところ「ガンです」と言われたら、がっかりします。反対に「どうやったら、うまくガンになれるだろうか。ガンになればいいな」と思つていて、ガンで楽に気持ち良く死のうという気構えであれば、ある時、体の調子が悪くなつて、病院で診察してガンだと言われれば、何となく「良かったな」という気がします。同じ病気になつても、不幸のどん底に墮ちるのと、何となく幸せを感じるのでは、随

分な差です」

と書かれています。私の主治医でもある京都のS医師は、「私は家内よりは一日でも早く死にたい」と言われるんです。「今までは医者として生活してきて、掃除・洗濯など家事をしたことがないのです。家内がいなければ、生活が出来ないのです。だから一日でも早く死にたいのです」と話された。そこで私は「先生、死ぬって、どういう病気で死にたいのですか」と尋ねました。すると、医師は「私は癌になりたい。実は癌は死ぬまで意識がはっきりしているのです。死ぬ前に世話になった家族や縁のあった方々に、ありがとうとお礼を申し上げたいのです。だから癌が良いのです」と話された。

さらに朝日俊彦医師の著書にもどって紹介したい。

「ご夫婦の方にとって、お勧めは、男性が先に死ぬ方が、大体物事がうまくいきます。残っても悪いとはいきません。けれども、今の日本人の生活様式からいきますと、夫婦でご主人が先に死んだ方がうまくいきますね。ご主人が先に死ぬには工夫がいきますよ。例えば、ご主人がそこその歳になった時に、家族の味噌汁を先によそってしまいます。その後、ご主人の分だけは小さじに一杯塩を入れるなどです。何か工夫をしていくことが大事だと思います。そうすれば、ご主人の血圧が確実に上がっていきます。奥さんより先に死ぬ工夫をしておけば、その人は幸せに死ねます。ご主人が残されては、そういうわけにはいきません。子供から見放されますしね……。自分を最後まで面倒を見てくれるのは、妻しかいません。妻が元気なうちに死ぬ工夫が大事です。この間も、八十二歳の患者さんが前立腺ガンと糖尿病を患っていました。このご主人はとにかく甘党で、おはぎやまんじゅうが大好き

だったのです。コーヒーには砂糖を三杯入れます。奥さんは買い物に出かける時、ご主人が甘い物を食べたらいけないということで、隠すわけです。ご主人は奥さんが買い物に出かけたのを見計らって家探しする。甘い物があるはずだといって……。奥さんは隠すのに疲れ、ご主人は探すのに疲れ、夫婦が疲れたところで外来に来て、「疲れるんです」と言われました。その時、僕は奥さんに聞きました。「もしご主人が亡くなったら、仏壇にご主人の好物だったまんじゅうやおはぎを供えないの」。すると奥さんは、「それは主人の好物だから毎日でも供えてあげます」と答えました。今度はご主人に聞きました。「あなたが死んだら仏壇に好物を供えてくれるそうだけれど、今食べるのと、死んでから供えてもらうのと、どっちがいい」。ご主人の答えは、「今食べるのがいい。死んでから供えてもらわなくても構わない」でした。そこで奥さんに、「もう食べさせてあげなさい。もう構わないじゃないか。ご主人の健康管理をするのは悪いことではないが、健康管理しすぎて、あなたの方が先に死んでしまったらどうしますか」と言いました。すると奥さんは、「私は子や孫に恨まれます。私はこの人を見送ってからでなければ、死んでも死にきれない」と言うわけです。そこで僕は、「甘い物を食べさせなかつたら、いつまでも死なないよ。今晚から食べさせなさい」と言いました。ところが、それまでニコニコして聞いていたご主人が真顔になって、「ということは先生、私に早く死ねというのですか」と聞きます。「そうですね。あなた考えてご覧なさい。奥さんより長生きして何かいことがありますか」。そう答えると、ご主人は、「私は妻よりも先に死ねなかつたら、妻にとり残されたのでは、一生の不覚です」と言うので、「では、せつせと美味しい物をいただいて、奥さんより先に

逝くよう努力しましょうね」と言つて、帰つてもらつたのです」

とあります。いかにして死を迎えるかは、大事なことであり、私も大阪大学の医師や看護師のグループとともに、自身の良き終末期と一緒に語り合う勉強会に参加しています。極楽浄土に旅立つという心構えはとても大切です。そうすることによって大往生が可能になります。この意味では最後の死の瞬間をいかに良くしていくかが、人間にとって大きな課題だと思ひます。

### 三心

「若有衆生願生彼国者發三種心即便往生何等為二一者至誠心二者深心三者廻向發願心具三心者必生彼国」

(もし衆生ありて彼の国に生ぜん願う者は三種の心を發せばすなわち往生す。何等を三と為す、一つには至誠心、二つには深心、三つには廻向發願心なり、三心を具する者は必ず彼の国に生ず)

(『觀無量壽經』)

### 一、至誠心(眞実の心)

「一には至誠心、いわゆる身業に彼の仏を礼拝し、口業に彼の仏を讚歎称揚し、意業に彼の仏を

専念觀察す。凡そ三業を起こすに、必ず須く眞実なるべし。故に至誠心と名づく」

(善導大師)

通常は「誠を至す」であるが、人間の心底は所詮、凡夫であり眞実至誠の無い存在と気づかれる。

「至とは眞なり、誠とは実なり。一切衆生の身口意業に修する所の解行必ず須く眞実心の中に作すべきことを明さんと欲す。外に賢善精進の相を現わし、内には虚仮を懐くことを得ざれ。貪瞋邪偽奸詐百端にして、悪性やめ難きこと蛇蝎に同じきは三業を起こすと雖も名づけて雑毒の善となす。」

(善導大師)

「眞実の心とは正直の心なり、正直の心とは、飾らざる心なり。法蔵菩薩の、因中にして六度万行を選び捨てたまひし心は眞実なりと知るは我等が眞実なり。別に法蔵菩薩の御心を離れて眞実を尋ぬべからず」

(西山上人 『五段鈔』)

「至れる誠の心」

（西山上人）

「出来ないことは出来ない」と知る正直な心、飾らない心をいう。  
至誠心は阿弥陀仏の側において受け止める。他力の至誠心

## 二、深心（深く信ずる心）

「二に深心、即ちこれ真実の信心なり。自身はこれ煩惱を具足する凡夫、善根薄少にして三界に流転して火宅を出でずと信知し、今弥陀は本弘誓願および名号を称すること下十声一声等に至るまで、定んで往生することを得と信知し乃ち一念に至るまで疑心あることなし。故に深心と名づく。」

「深心とは深く信ずる心なり」

（善導大師）

「他人が知ってくれぬ」って。あゝだれが未だかつて「自分」をすら知った者があるうか」

（八木重吉）

機の深信 真実心なき自身をありのままに信ずる。

「決定けつじようして深く信ず、自身げんは現こに是れ罪惡生死ざいあくしじゆうじの凡夫にして、曠劫くわうきやくよりこのかた常に没ぼつし、常に流る転てんして出離しゆつりの縁えんあることなしと」

(善導大師)

「罪惡深重の衆生」「妄想顛到の凡夫」

(法然上人)

### ●カッコウとオオヨシキリ

以前、テレビの放送で、カッコウとオオヨシキリの生態について報道されていました。カッコウは卵は産むが、自分でふ化する事が出来ないとの事であります。そこで関心をいだいて視聴しました。すると、オオヨシキリと言う可愛い小鳥が仮親として育てるのであります。どうするかと言うと、オオヨシキリが巣から離れた五秒ほどを逃さず、その巣へ産み付ける。しかもカッコウの卵はオオヨシキリの卵より必ず早く、十日間ほどでふ化するのであります。驚くことにしばらくすると、カッコウのひな鳥はオオヨシキリの卵を翼で巣から外へ出すのであります。カッコウのずるがしこい習性にあきれ果ててみると、オオヨシキリの親鳥は餌を運び続け、カッコウの口元に与えている。又、カッ

コウが糞ふんをすると、それを口にくわえて処理している。半月もすると、巢からはみ出すほどに大きく育ち、近くの木々の間を飛び回れるほどになります。そしていつとはなしに、どこかに飛び去っていくのであります。

私たち人間はまさにカッコウと同じではないだろうか。毎日の生活の中で、自分中心な考え方をしていることのいかに多い事か、仏からご覧になられたら、ずるがしこい生き方を平気でやっているのではないだろうか。仏はその様な私達を見捨てる事もなく、暖かくお育て下されているのです。

自身について深く内省ないせいし尽くした信心

「地獄ひじょう必定じょうようの凡夫」

(親鸞聖人)

## 注

(1) 口訣とは単に訣けつとも言う。いずれも文字に尽くし難いものを口伝くでんで伝えること。

## 第七席

法の深信 仏（阿弥陀仏・釈尊・諸仏）の救いを信ずる。

「決定して深く信ず、彼の阿弥陀仏は四十八願をもって衆生を攝受しやうじゆしたまう。疑うたがいなく、慮おもんばかりなく、く彼の願力じやうりきに乗じて定さだんで往生を得んと」

（善導大師）

どん底に落ちきった凡夫を救わんと誓われた阿弥陀仏の本願の救いを信ずる。

「むつかしい路もありましょう。しかし、ここに確かな私にも出来る路がある。救ってください」と信じて私を「なげだします」

（八木重吉）

「煩惱ぼんのうを断たてとは告つげらず、乱みだれたる心もゆるし、人間の性さがのまにまに、みほとけの国くにに往ゆき生いく。この道みちは誰たれかひらきし、慕したわしの情なさけある、われらが祖そ師しや」

(佐藤春夫 法然上人七百五十回御遠忌に作詞)

「われ浄土宗を立つるころは、凡夫ぼうどの報土ほうどに生まれしめんがためなり」

(法然上人)

「一心いつしん専念せんねん弥陀みだ名号なごう 行住坐臥ぎようじゆうざが 不問ふもん時節じせつ久近くこん 念々ねんねん不捨ふしや者しや 是名ぜみ正定しようじよう之業ごうじゆん順彼じゆんび仏願ぶつがん故こ」

(一心いつしんに専もつら弥陀みだの名号なごうを念ねんじ、行住坐臥ぎようじゆうざがに時節じせつの久近くこんを問とわず、念々ねんねんに捨すてざる者、これを正定しようじよう之業ごうじゆんと名なづく、彼の仏願ぶつがんに順したがうが故ゆゑに)

(善導大師)

### ●菅原りえ子『季節がくれば』

京都国立博物館の学芸部長をされている西山厚氏は菅原りえ子様の詩集『季節がくれば』を出版された。昭和五十五年のあわただしい師走にひっそりと世に送り出されました。

著者の菅原りえ子様は宮城県の方である。彼女は先天性の重症くる病で、自分で立つことも坐る事も出来なかった。寝たままで、もちろん学校へ通えなかったが、独学で字を覚え、折々に詩を作つて

いました。

寝たままの姿勢で、ペンを逆方向に持って、枕元の紙に書きつける苦心の創作であった。それが月刊誌『詩とメルヘン』に度々掲載された。その一編を読んだ友人の西山氏が共感し便りを交わすようになった。そして、この年の年賀状には「今年中に詩集を出したい」と彼女の小さな夢が書かれました。ところが、年賀状の届いた五日後に彼女は急性肺炎のため二十九歳の短い生涯をはかなく終えたのであります。

一度も出会った事がなかったが、彼は春に宮城まで墓参をされた。それから彼は菅原様が変わって何とか、遺言を実現してあげようと、残されたノートを整理し『季節がくれば』と題する遺稿詩集を出版された。その一冊が私の手元に届けられ、しみじみ読ませていただいた。菅原様は生前、不平、不満を決してもらす事がなく、微笑みを絶やさなかったと言う。逆に周囲の人たちが心配事や、悩みなどを相談にくる程だったという。ひたむきに生きる女性の優しさが伝わってくる詩集であります。西山氏は「重いハンデにめげず、明るく生きた、そんな風な人生があることを、一人でも多く知ってもらえれば」、との願いで彼女の夢をかなえられた。この詩集を手にして、西山氏のあたたかい優しさに感動しました。

「やさしからざる言葉を受けて

黙しているとは言え

内なる憎しみに汚れる一瞬

そこに花があった

まぶしいものがあるとしたら花

その輝きに恥じている」

西山氏からは次の手紙が添えられていました。

「あけましておめでとうございます。年賀状、ありがとうございます。多くの人たちの御好意に支えられて本が出来ました。十ヶ月かかりましたが、その間に私の気持ちはかなり変化したように思います。「よし！私が本をだしてやろう！」と三月に決意した時にはこういう人が早く死んでしまったことに對する腹立たしさが、世間の人たちへの腹立たしさにもなっていました。もっとみんなが理解してあげ、できる事をやってあげればよいのにと、怒っていた訳です。〈私が〉と思った時、それは〈私だけは違う〉みたいな思い上がりがあったのです。その後、本当に大勢の方々に助けられました。私 はみんなが支えてくれた台の上をピョン、ピョン、ピョンと跳んで目的地にたどり着いたみたいです。ですから、何も苦勞らしきものをしませんでした。人目につかないところでじっと支えてくれている人たちの暖かさに触れて、私も成長させてもらったのではないかと思っています。今年もよろしく御指導下さいますよう。西山」

菅原様の詩集や西山氏の手紙に見られるのは自己との真実の出会いであります。

私達は毎日、色々な出来事に出会う。その経験が本人にとって有益になるかどうかは心の持ち方に非常に関係するだろう。ある人は貴重な経験をしながら、それを見過ごしてしまふ。又、ある人はささやかな経験から、この上ない大切な事を学びとる。経験を有益にするのは、「求める心」であり「気づきの心」であります。

気づく信仰

### 三、廻向発願心（信仰生活に徹する心）

「三には廻向発願心、所作の一切の善根悉く皆回して往生を願ず。故に廻向発願心と名づく。」  
「自他の所修の善根を以て悉く皆眞実深信の心中に回向して彼の国に生ぜんと願ず」  
「もし一心をも少ぬれば、即ち生ずることを得ず」

（善導大師）

自身の本分に立ち返って善根や他人の善根を往生（お救い）に振り向けていく。

「妄念<sup>もうねんおし</sup>発りて制伏し難き時は、妄境<sup>もうきやう</sup>を便りとして、責めて厭欣<sup>えんこん</sup>を發すべし。(中略) 苦に逢<sup>あわ</sup>ん時は  
三途八難の苦を思ひ出して厭心<sup>えんしん</sup>を發して念仏を行はずべし」

(西山上人)

「三心と分けて説けども一筋に弥陀の大悲を知る心なり」

(関本諦承師)

すなおに合掌して南無阿弥陀仏と申せる。

### ●まことみこ

東井義雄師が『いのちとのふれあい』で「まことみこ」について次のように紹介されています。

「昭和の時代でしたから、ご存じない方もいるかも知れませんが、その頃、テレビを見てみると「マコ、わがままいってごめんね」「ミコはとつてもしあわせなの」と言う歌が聞こえてきました。あの歌は未だに忘れられません。あの歌の主「ミコ」の本当の名前は大島みち子様です。大島みち子様の『若きいのちの日記』の歌詞であります。

大島みち子は兵庫県西脇市の娘さんである。師範学校同期生のM君が当時西脇中学の校長を勤めていたのでたずねてみると、大島みち子を担任したこともあるという。子どもの頃、たいへんかわいい

子で、頭はすばらしく冴えており、気だては優しく、体も健康そのものといったいい子であったという。それが高校に進んだとき、顔の軟骨が腐るといふ厄介な病気にかかった。入院治療の日が続き、五年かかって高校を卒業、同志社大学の文学部に進んだが、そこでまた病気再発、入院生活に入った。その間に「マコ」（河野誠）という学生と知りあい、互いに手紙をとりかわす間柄になっていったが、とうとう病院のベッドの上で短い生涯を閉じていった大島みち子の日記を集めたのがその本であった。大島みち子はその日記の中に次のように書いている。病院の外に健康な日を三日ください。

一週間とは言いません、十日とは言いません。ただの三日でいいですから病院の外に健康な日をくださいと言っていると、みち子さんのつつましい性格がうかがえると思うのです。

#### 一日目

わたしはとんで故郷に帰りましょう。

そして、おじいちゃんの肩を叩いてあげて、

母と台所に立ちましょう。

父に熱カンを一本つけ、

おいしいサラダを作って、妹たちと楽しい食卓を囲みましょう。

## 二日目

わたしは、とんであなたのところへいきたい。

あなたと遊びたいなんていいません。

お部屋のお掃除をしてあげて、

ワイシャツにアイロンかけてあげて、

おいしいお料理をつくってあげたいの。

そのかわり、

お別れするとき、やさしくキスしてね。

## 三日目

わたしはひとりぼっちで思い出と遊びましょう。

そして、静かに一日がすぎたら、

三日間の健康ありがとうと、

笑って永遠の眠りにつくでしょう。

私は、読みながら、現代娘の大島みち子に教えられた気がした。彼女がひたすらに求めているものは、みんな、私たちが日常茶飯の中で、当然のこととして、粗末に踏みにじっているものばかりであ

る。その、どこにでもころがつている日常茶飯のこと、それを心を新にとりあげさせてもらおうと  
いうことを、大島みち子はわたしに教えてくれたのである。「私が、この詩から教えられるのは、私  
たちが、何でもないあたりまえのこととして見過ごしてしまうことの中に、生きると言う事の大切な  
意味を味わってみせてくれることです。ただの三日、健康な日がいただけたら、とんで故郷に帰  
り、可愛がっていただいた祖父の肩を、存分に叩いてあげたいと言うのです。母親と一緒に台所に立  
つことの中に、母親の娘に生まれた幸せを味わせてもらいたいと言うのです。苦労ばかりかけっ放し  
の父親に、熱い爛を一本付けさせて頂くと言うのです。おいしいサラダをつくって、妹たちと楽しい  
食卓を囲みたいと言うのです。愛する人との出会いを「二日目」のこととしていることの中にも、大  
島様の人柄が感じられるではありませんか。しかも、「あなたと遊びたいなんて言いません」と言い、  
愛する人の部屋の掃除をすることの中に、女の幸せを味わいたいと言うのです。愛する人のワイシャ  
ツにアイロンをかけてあげることの中に、女の生きがいを味わいたいと言うのです。愛する人の好き  
な料理を作ってあげることの中に、女の生まれがいを味わせてもらいたいと言うのです」  
私達は日々の生活の中で、こういうことを見過ごして生活しているということをもう一度、この中  
で教えていただいているのです。

「念仏とは自己」を発見することである」

(金子大栄<sup>①</sup>)

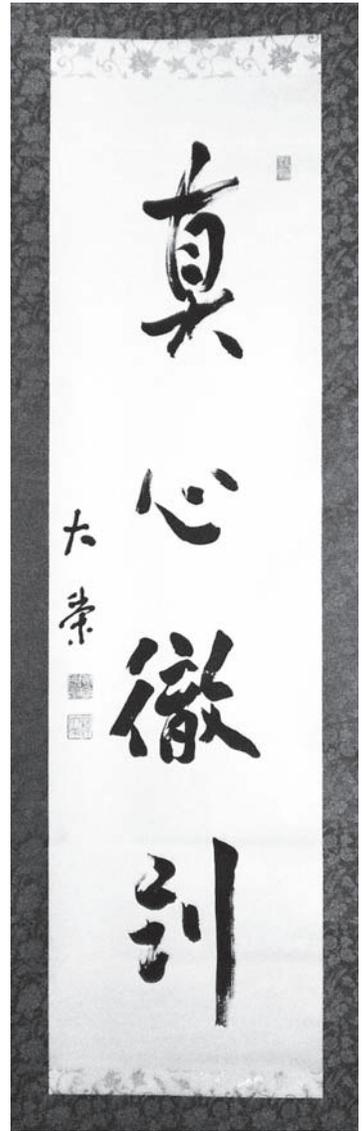
●金子大栄師との出会い 眞心徹到しんじんてつとう（軸）

「念仏とは自己を発見することである」と金子大栄師が言われています。私が京都西山短期大学を卒業してから、もつと仏教を勉強したいとの思いで、師僧に相談をいたしました。京都には佛教大学（浄土宗）、大谷大学、龍谷大学（浄土真宗）、花園大学（禅宗）といろんな宗派の仏教の大学があり、師僧は「随功、どの大学にいきたいのか」と聞かれ、「私は大谷大学へいきたい」と申しました。大谷大学を志望したのは会社勤務をしていた頃から、書店でみかけては読んでお名前だけは知っていた金子大栄先生がおられたことによりです。何とか、仏教学と英語と面接の試験に合格出来て、編入学が決まった頃から、入学の後には、先生の授業を受けたいと心待ちにしていました。

ところが、学期が始まってからも、毎週、ピロティーに休講の掲示がされたのであります。不安に感じ、真宗学研究室で尋ねると、先生の病気の為でありました。今まで、心待ちにしていた願いがくじかれたようなショックを受けました。それまで書物を通して、先生のご信仰に触れていた私は直接にお会いしたいとの願いを抑える事が出来なかった。この様な気持ちから、一学生としての身分を恐縮しつつも、お見舞いに寄せて頂こうと、ご都合をうかがう電話を掛けさせてくださいました。梅雨時期とはいえ、良く晴れた六月十五日の午後二時にお見舞いの梅干を持参して寄せて頂きました。

先生は丁度、ご気分もよくなられておられた。とは言え、九十四歳のご高齢でお耳が遠くなられてはおりましたが、非常に威厳を感じました。お耳が遠くなっておられたこともあり、そばで奥様が仲立をしてくだされてのお話となりました。先生は開口一番「して、問題は？」とのお尋ねでありまし

た。私は特別に用意した問題意識も持たずに、ただ先生を前にして、緊張していたので答えに困惑してしまいました。先生は、それから「現在の日本人は一億総知識階級と言う事が出来る。書物で読み、知っていると云う人は多いが、それだけでは不十分である。仏教を学ぶ者は先ず、その教えが、現在社会において、どのような貢献が出来るのかを考えなければいけない」と申され、先生のご信仰のよりどころとされるお祖師、親鸞聖人を引かれて、浄土三部経で南無阿弥陀仏の教は明らかにされているが、釈尊が最初に説かれた『華嚴経』と最後に説かれた『涅槃経』の二つの経典が思想的な背景になっている」とお話し下さった。まさに、釈尊の教えを思慕するお姿で接し迎え入れてくださった有難さをひしひしと感じました。感悦きわまつたなかで、先生にお名号のご染筆までお願いしました。先生は「この仏縁にて、書かせて頂ければよいが、もう目もかすみ、手も震えるからして、お名号は書かせてもらえない。だが変わるものを準備いたしましょう」とのお約束を頂いた。後日、奥様より連絡を頂き、再びお訪ねした折には、先生は床につかれておられるとの由で、直接にお礼を申すこともできずに失礼をいたしました。その一年余り後に、先生は往生なされた。一生涯のうち、僅か半時間しかお会いできなかったご縁ではありますが、毎年の六月頃には、先生のお姿を髣髴と思いうかべる事を私の安居としている。先生が私の為に書いてくださったのは「真心徹到」であり、これは南無の意趣であります。



金子大栄師の墨蹟

「あれば鳴る なければ鳴らぬ 鈴の玉 胸に信心 あればこそ鳴る」

「信ありて解なければ、無明むみょうを増長ぞうちようし、解ありて信なければ、邪見じやけんを増長す。信、解、円通えんつうして  
行の本もととなる」

〔涅槃経〕

●正福寺の不動明王 受け止めで心が転換

私は現在、京都、嵐山の近くの観世寺と言う寺院の住職もしながら、京都西山短期大学の学長を務めさせていただいています。その前には亀岡市に正福寺と言う寺院があり、その住職を十年近くしておりました。その寺院には、専住の住職はおられませんでした。その時、家内と結婚した当初で、

新婚旅行から帰ってきて、その寺院で住職をするようにお話があったのです。その寺院に伺ってみると、雨戸を閉めたままで、しばらく使用していない畳も湿っているようでした。だから座敷の畳を踏むと沈むのです。この強い印象から私はこんな寺院での住職はできないと思いました。だが、とにかく本尊を拜んで帰ろうと思いました。檀家の総代がお茶を出してください、この住職として迎えるようと一所懸命に説得をするのです。寺院の建物があっても住職がないということは、檀家にとつては不自由なことで、大変なことです。本来、住職は「縁あれば住し、縁なければ去る」のです。住職は三界に家なしで、釈尊の仏教の世界に入って寺院に住しても、自分のものではありません。寺院は仏をお祀りする為のものです。総代は檀家の要望もあって、私に対して一所懸命に説得されました。だが、最初の強い印象から、ただ早々に失礼したい気持ちでいました。そうすると、玉記慎也君と言うまだ幼稚園にも行っていない子供が祖母に連れられて来られた。なんとなく聞いていると、慎也君が「お祖母ちゃん、お寺の掃除しないといかんね、ホーキはどこ？」という話し声が聞こえました。この言葉が私の心に仏の声として響いてきました。そのように慎也君のその言葉を受け止められました。私は「この住職をさせて頂かなくてはいけません」と決心した訳です。

ところが正福寺の御本尊は不動明王でした。朝早く起きて不動明王を拜むと怖い顔で睨んでいます。火炎を背にして、左目を閉じ、右目で「ギョロツ」と怖い顔で睨みつける。口先から牙を出し、右手には剣、左手に索を握る、忿怒ふんぬこの上なき怖い姿であります。拝みながら自然と後ずさりするようです。ある時に、なんで不動明王はこんなに怒っているんだろうと思いました。不動明王の怒りは全く

己のための怒りではないことに気づかせていただきました。それに反して、私自身を振り返るに、欲望に振り回され、自分勝手から他をそしり、怒っていることのいかに多いことか。いつも自分の欲望を満足しようとして、怒り、少しでも叶えられれば片時の喜びにひたり、又別の欲望を追う。人間なんてつまらないものだ。ところが不動明王はずっと怒っている。しかも不動明王の火炎は私の障難や心の中のけがれを焼き尽くすためにある。索は私の煩惱（百八煩惱）をしばりつけ、剣は私の煩惱を断ち切るためなのであります。不動明王は決して自分の欲望の為の怒りでなく、純粹にして真実な怒りをもって、私を地獄へ行かせまいと守って下さり、私を教え導いて下される。怒りのお慈悲のすばらしさに気づかせていただき、不動明王が親しく感じられてきました。

結局、私たちは心の受け止め方次第で、心が転換していくのです。

「解は行を浄むる故に三心の悟既に備わりぬれば、一切の諸の行業必ず成ずべし」

（西山上人）

南無の心を生じさせ「阿弥陀仏」に絶対の帰依の心が備われれば、そこにすべての行いが生ずる。

## 注

(1) 金子大栄師（一九八一～一九七六）は近年の仏教学者、真宗大谷派の僧侶で大谷大学名誉教授など歴任される。

## 第八席

起行 どのように実践するか 信仰生活のあり方

↓ 阿弥陀仏と一体の生活 悦びからたちはたらく

「信火内しんかにあれば行煙外ぎょうえんに現わる」

安心は心の証得であるから、その証得は自おのずから外に表れてくる。  
阿弥陀仏のお慈悲を信じ帰依すれば、必ず身と口と意の三業に現れてくる。

「念仏は申すものでなく、行うものである」

「起行は五念門ごねんもんである」

（関本諦承師）

（善導大師）

五念門（天親菩薩 『浄土論』）

- 一、身業礼拝門  
阿弥陀仏を礼拝する行い
- 二、口業讚歎門  
阿弥陀仏を悦びほめる行い
- 三、意業憶念觀察門  
阿弥陀仏を意で憶い見る行い
- 四、作願門  
阿弥陀仏の前に常にあらんと願う行い
- 五、回向門  
阿弥陀仏に全ての善根功德を振り向ける行い

「五門すでに具すれば、定んで往生することを得る」

（善導大師）

「唱<sup>とな</sup>うる功<sup>こう</sup>によりて往生するぞと申すにはあらず。仏<sup>ぶつ</sup>体が往生<sup>たい</sup>の体にてありけりというなり」

（西山上人）

三業実現の念仏

「若<sup>にやく</sup>念<sup>ねん</sup>仏<sup>ぶつ</sup>者<sup>しや</sup>、当<sup>とう</sup>知<sup>ち</sup>此人<sup>にん</sup>、是人<sup>ぜにん</sup>中<sup>ちゆう</sup>分<sup>ぶん</sup>陀<sup>だ</sup>利<sup>り</sup>華<sup>け</sup>、観<sup>かん</sup>世<sup>ぜ</sup>音<sup>おん</sup>菩<sup>ぼ</sup>薩<sup>さつ</sup>、大<sup>だい</sup>勢<sup>せい</sup>至<sup>し</sup>菩<sup>ぼ</sup>薩<sup>さつ</sup>、為<sup>い</sup>其<sup>ご</sup>勝<sup>しやう</sup>友<sup>ゆう</sup>、当<sup>とう</sup>坐<sup>ざ</sup>道<sup>どう</sup>場<sup>じやう</sup>、

生諸仏家」

(若し念仏する者は、まさに知るべし。此の人は是れ、人中の分陀利華なり。觀世音菩薩、大勢至菩薩がその勝友と為る。まさに道場に坐して、諸仏の家に生ずべし)

(『觀無量壽經』)

「弥陀たのむ 身となりぬれば なかなかに 暇はありて 暇なの身や」

(西山上人)

作業 信仰生活の用心(心がけ)・態度(成し遂げるための絶え間ない覚悟)

「四修の法を行じ用いて、三心(安心)・五念の行(起行)を策して、速やかに往生することを得しむ」

(善導大師)

「作業は安心起行の二つを、まめやかに成就せしむる用心なり」

(明秀上人、関本諦承師)

## 四修

一、恭敬修くきやうしゆ（勤修丁寧ごんしゆていねいの義）  
阿弥陀仏を恭しく敬う。

「仏法は敬を以て首となす」

五体投地ごたいとうち

「何ものかを敬うことなく、何ものかを信順することなくして、生きることが苦しみである」

（『阿含経』）

傲慢心ごうまんしんは修行における敵であり、素直な敬虔けいけんさをもって修していく。

二、無余修むよしゆ（二道無二いちどうむにの義）  
阿弥陀仏の名を専らもっぱに称していく。

雜念心ざつねんしんは修行における敵であり、他心なく一筋に心を込めて修していく。

三、無間修むけんじゆ（不断相統ふだんそうとくの義）  
阿弥陀仏を常に離れない。

怠慢心たいまんしんは修行における敵であり、絶え間ない精進は念仏生活に必須である。

## ●俳句 村上四明師

村上四明師は京都市内の寺院住職であり俳句を嗜まれた。作家として活躍されている村上春樹氏の叔父にあたる僧でもあります。私の勤務している大学図書館の落成式の祝宴で一献差し上げに寄せて頂いた。その時、私の頭はツルツルに剃っていました。老僧は私の姿を見るなり「青剃りの僧もよろこぶ春の宴」と即座に俳句を詠まれた。私は直ちに筆と硯を持ってきて、色紙に今の俳句を染筆して欲しいと依頼しました。少々ほろ酔い気分であった老僧は「私に書けと言うのか」と言いながらも、私の強引さに屈してくださった。それ以来数年ぶりにご縁を得た席で俳句の話となりました。私はこの老僧は経験したことを即座に俳句にできるのだらうと思っていました。そこで、「先生は何でもすぐに俳句として浮かんでくるんですね」と憧れの思いで尋ねた。すると、「バカ言え、そんなに急に作れるものではない。何時も俳句のことを考えているからだ」と、私にとっては思いがけない返事でありました。無間修における阿弥陀仏を常に離れない精神と同じでありましょう。

### 四、長時修（畢命為期の義） 命終の後までも阿弥陀仏との關係を保つ。

生涯を通して念仏を相続して、恭敬修・無余修・無間修を修していく。

「一心専念弥陀名号 行住坐臥 不問時節久近 念々不捨者 是名正定之業順彼仏願故」

（善導大師）

「智者ちしやのふるまいをせずして、ただ一向いっかうに念仏すべし」

(法然上人『一枚起請文』)

### ● 円空仏 生涯を貫く生き様

古都の奈良や京都には素晴らしい仏像が祀られています。本山に隨身していた最初の夏休みに嵯峨の釈迦堂の仏像を拝観したくて訪ねたことがあります。釈迦堂には三国伝来の瑞像梅檀の国宝釈迦牟尼仏像が祀られています。夏の炎天下のもと到着したところ、残念ながら本尊の厨子は閉じられていました。とにかく、外陣に置かれていた木魚を叩き経を唱えることにしました。その姿を受付でご覧になられていた法尼が声を掛けてくださった。「どちらから来られましたか」「ハイ、私は粟生の光明寺に隨身して修行を始めている者です。念願の釈迦像にお参りさせていただきました」と感謝を申しました。すると、「折角ですから、拝んでいただきます」と開帳してくださいました。その時の感動は忘れがたいことです。

また、兵庫県小野市の浄土寺の阿弥陀仏像が西光を背に受けて浮かび上がった仏像を拝んだ時の感動も深く記憶に残っています。まさに現世で仏の来迎を受けた思いでありました。

江戸時代には円空という仏師が出られました。円空は山岳修験者でありました。洞窟に籠もり、周囲から拾ってきた枯木を鈍一丁で仏像に削りあげています。そして北海道から東北・関東・中部・関西地方に渡って広く旅をされ、その先々で荒削りの仏像を作られています。以前に円空仏を沢山に祀

られている飛騨高山の千光寺を訪ねたことがあります。どの仏像も私の仏像についての通念を超えるものでありました。

円空仏についてのエピソードが伝わっています。戦後に円空仏に対する仏像ブームが起きました。その時に偽の仏師が表れて円空仏を真似て仏像を刻み商売を始めたのであります。荒削りであり、偽仏師はいとも簡単に作っていきました。その時期は電柱が木製からコンクリートにやり替える頃でありました。そこでその材料として電柱の廢材を用いられました。

だが、暫くすると不審に思われてきました。実は偽仏師が沢山の円空仏を刻んでいるうちに、技術が上達していきました。そこで荒削りの切れ味が出せなくなっていたのであります。その結果、悪行が発見された次第であります。

しかし、円空は生涯を通して荒削りの仏像を彫り続けています。技術を超えた芸術の世界を貫き通しています。円空の精神世界が窺えるとも考えます。

「ただし三心、四修と申すことの候は、みな決定けつじようして、南無阿弥陀仏にて往生するぞと思ふ内にこもり候なり。この外ほかにおくふかきことを存ぞんぜば二尊にそんのあわれみにはずれ、本願ほんがんにもれ候そんこうべし」

(法然上人『一枚起請文』)

「身と口と 意こころのほかの 弥陀なれば われをはなれて となへこそすれ」

(法然上人 尼崎市の如来院御詠歌)

### ●念仏の功德 認知症

念仏の功德についてお話をいたします。近年、日本では高齢化社会になってきていますが、長生きをされる方の秘訣は、第一に何事にも腹を立てない、第二にのんびりと規則正しい生活をする、第三に素食でよく働くであります。京都の清水寺の管長大西良慶師が百五歳の時に書かれた言葉に「長寿十則」があります。

#### 「長寿十則

- 少肉多菜・・・肉食を少なく、野菜を多く食べる。
- 少塩多酢・・・塩分を少なく、酢のものを多く食べる。
- 少糖多果・・・砂糖を少なく、果物を多く食べる。
- 少食多齟・・・食事量を少なく、よく噛んで食べる。
- 少煩多眠・・・煩雑を少なく、睡眠を多く取る。
- 少怒多笑・・・腹を立てず、笑いの生活をする。
- 少言多行・・・言葉を少なく、体を多く動かす。

少欲多施・・・欲望を少なく、施しを多くする。

少衣多浴・・・衣類は薄着で、風呂には多く浴する。

少車多歩・・・車に乗ることを少なく、歩きを多くする。」

ある時に、檀家の小西茂明氏が白浜に行かれた帰りに、土産を持って寄ってくださった。その品には「五十、六十、花ならつぼみ、七十、八十、働き盛り、九十になってお迎え来たら、百まで待てと追いつ返せ」と書かれています。近年、高齢者のなかでも記憶に残っているのは藤沢みつ様です。百三歳まで老人大学で勉強されていました。このような気力が大切なのです。

蟹江ぎん様、成田きん様のテレビ番組を見たのは平成四年九月十五日(敬老の日)午後六時のニュースでありました。その時に姉の成田きん様が言われたことは、「若けえ人は年寄りに冷えていでねえ」自分のことは自分でやる。そういう気力を出してやる」。蟹江ぎん様が相づちしました。そして、「気力がなければ生きていけんよね」。この気力の程については、朝日新聞(平成十三年三月十三日)の蟹江ぎん様の報道にも知られる。次に紹介したい。

『長寿の秘訣は?』。必ず出てくるその質問には、いつもこう答えた。「まずは気力。皆さん、気力が大切ですよ」。昨年一月、双子の姉、成田きんさんに先立たれ、その気力が衰えた。呼吸が困難になったり、歩けなくなったりした。以来、イベントなどの招きは、ほとんど断った。日がな一日、縁側で過ごすようになった。同居している五女美根代さん(七七)と、近所の三人の娘が、交代で来ては、

話し相手になった。「この世の中はよくできとる」「一度、研究のために、あの世へ行ってみるとなあ」。テレビに出ていた時と変わらぬ饒舌ぶりだった。亡くなる一週間前から呼吸が乱れ、二日前の夜から娘たちが順番に添え寝した。二日前は三女（八二）が、前日は長女（八七）、当日は四女（七九）。同居の五女を含めて健在な四人の子供たち皆が、別れのときを過ぎすことができた。美根代さんは「全員に自分の最期を見せてから逝った。うちの母はどこまでも筋が通ったね」としみじみ話した。「死んだら、仏様（仏壇）の引き出しを開けてみてくれ」。家族にそう伝えていた。亡くなった日の朝、家族が開けると、白い着物や手つ甲などの死に装束が一式出てきた。布袋には、三途の川を渡る六文銭として、十円玉が六枚入っていた。いつも、口癖のように言っていた。「自分のことは、自分でやるもんだ」。着物は、あちこち黄ばんでいた。背が縮んで寸法も合わなかったので、畳んだまま棺の中に納められた。』

ところが高齢化社会に伴って認知症が課題となっています。八十歳以上の方は五人に一人、認知症になるようです。厚生労働省の発表によると二〇〇〇年には認知症の方が百五十万人、二〇一五年には二百四十七万人の認知症患者と推定されています。日本の人口一億二千万人、一世帯四人家族として、二百四十七万人という数字から試算してみると、二〇一五年には十二世帯に一人の認知症患者を抱えていることになります。

人間の脳は百四十億個の細胞によって構成されています。その中の十万の細胞で記憶したりしているようです。老化に従ってこの数が少くなるということで認知症になります。いわゆる記憶障害が起

こるのです。言葉が出ないし、理解出来ない。物の名前や用途が分からなくなる。筋道を立てて事柄を遂行できなくなる。お金の管理ができなくなったり、自分で薬が飲めなくなる。日時や居場所が分からなくなる。こんないろいろな症状が出てきます。脳血管性認知症は脳の血管が詰まるとか破裂して発症します。だが、脳血管性認知症は早期発見で良くすることができます。他にレビー小体型認知症があります。これは日時によって症状が変動するようです。幻想が繰り返される、パーキンソン病の症状だとか、自律神経症状にかかわる病です。さらにアルツハイマー型認知症で脳が縮んでいく記憶障害です。このアルツハイマー型認知症は現在の医学では治せなかつたのです。京都大学の山中伸弥教授のiPS細胞の発見によって、医学的な治療による改良が期待されています。

そこで物忘れチェックがあります。三つあり、一つ目は何度も同じ話をすると思摘される。二つ目が数日前のことが全く思い出せない。三つ目は物が見つからないと、盗まれたと思うです。

また、記憶力のミニメンタルテストがあります。たとえば、「ボール、旗、桜」とかを覚えていただいて、しばらく他の話をして、「さっきの三つてなんでしたかな」と尋ねて答えてもらおう。あるいは百から七を引いてください。そこから七を引いてください。又そこから七を引いてください。すると計算ができなくなる。「世界地図」（せかいちず）を逆から（ずちいかせ）言っして下さいなどとテストをするのです。こんなミニメンタルテストがあるので。どうぞ、皆さまも自己診断してください。

この様な症状になられる可能性のタイプがあるようです。一には自分勝手に、感情的な方。二には非社会的で無趣味な方。五重相伝会に参加されたりするのは社会的であり、認知症にはなりにくい

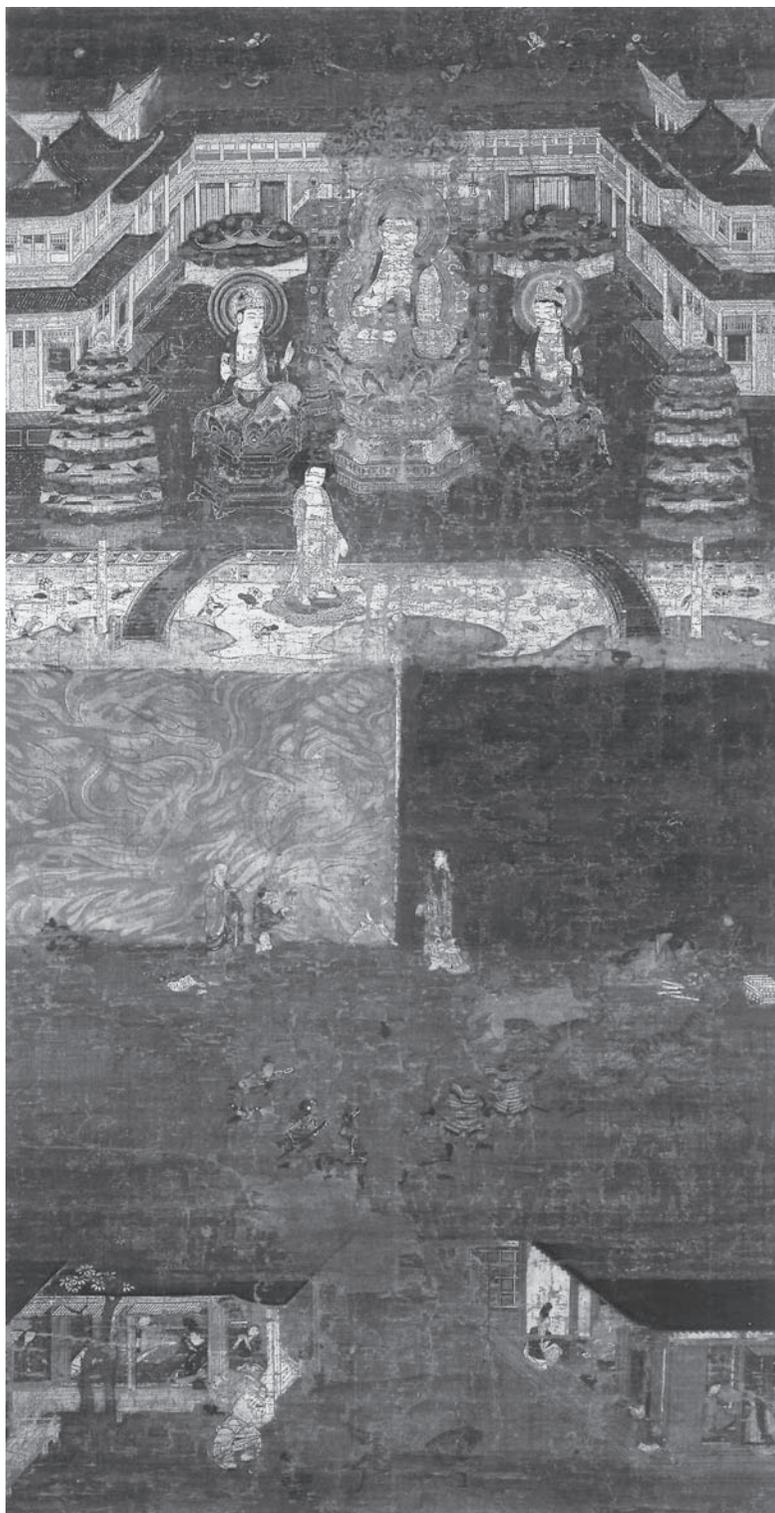
です。三には運動不足の方。四には魚や野菜や果物を食べない方。五には高血圧・糖尿病など生活習慣病の方です。このような方は気をつけなければいけません。認知症を防ぐライフスタイル六箇条も紹介されています。一には人とお付き合いをする。二にはオシヤレをする。三には趣味を持つ。四には観察しながら散歩する。五には三十分以内の昼寝をする。一時間以上昼寝すると、アルツハイマー型認知症になりやすいと言われています。六には魚・野菜・果物を食べる。要は、食生活が大事であり、意欲的であること、朗らかで明るく生活することが大切なのです。

そこで私が念仏の功德についてお伝えします。二十年ほど前、医師会に招かれまして法話をいたしました。そこに認知症の専門の先生も出席されました。法話を終えたときに、「長寿時代の仏教による健康法」という文を書かれた医師から本をいただきました。この本の一部を紹介いたします。

「お念仏申してる方はほけないです。お坊さんはほけませんね。お経をあげてますと深呼吸をします。お念仏申してると呼吸が整ってまいります。そして又、お念仏は口で言うのではなく耳で聞くわけですね。お念仏の声が聞こえてくると心が休まって来ます。ほけてからそんな事しようと思ってもだめです。ほける前から常にお念仏する事です。すると自分が申すお念仏の声で心が静まってまいります。どんな赤ちゃんも、母親に抱かれると泣きやむように、如来様に今自分がいだかれているんだ、という気持ちが出てまいります。今、私が生きているのではなく生かされているん

だ、という気持になったときは、どんなぼけた方でも心が落ちついてまいります。長寿の時代になって、いろいろ病気になったり、ぼけに会うこともあるかもしれませんが。絶対にぼけにならない、という方法はないんです。でも、ぼけても不幸せにならない方法というのはございます。「わたしは、ぼけても大丈夫だ。」と思う人は、ぼけにくいんです。「ぼけたらいかん、ぼけたらおしまいだ。」と思つてると、えてしてぼけてしまいます。ですから「ぼけても大丈夫だ。すべては如来様におまかせして与えられた命を精一杯生きて行こう。今、出来る事を精一杯させていただこう。」という気持で、生活したいと思えます。すべては、お念仏から始まります。では、皆様と十遍、お念仏申しあげて終りにさせていただきます。同唱十念 南無阿弥陀仏・・・」

第九席



二河白道图

\* 絵図の説明

光明寺に所蔵されている重要文化財（国宝）であり、鎌倉時代に描かれたものです。法然上人の弟子の西山證空上人の頃に創られたものです。これはめったに展示されるものではなく、東京の国立博物館に寄託されています。この絵図の上方にありますのが、極楽浄土の世界、阿弥陀如来が描かれています。下方に現世、迷いの世界等々が描かれています。善導大師の書物の中に書かれている内容を西山證空上人の頃に描かれたものです。

二河白道にがびやくどうのたとえ

二河白道譬は善導大師が『観経疏』散善義の三心釈の後に引かれる譬喩であります。法然上人は『選択本願念仏集』三心篇に善導大師の二河白道譬を原文のまま引用しています。だが、法然上人はそれについて解釈を示していません。そこで、證空上人は二河白道譬についてどのような理解をしているのかに興味を懐かされる。證空上人の著書から復元する作業をすると次のようになります。

「この善導の二河白道譬は三心についての譬えである。この譬えは次の四段に分けられる。すなわち、

第一段 〈譬へば〉 〈休息することなし〉

第二段 〈此の人既に〉 〈必ず応に度るべしと〉

第三段 〈此の念を作す時〉 〈疑怯退の心を生ぜず〉

第四段 〈或は行くこと〉 〈慶樂已むことなし〉

ここで、各段の概要を述べると、まず第一段は、私共の心は煩惱は強く善心は微かである。善導も〈万劫修功実難続一時煩惱百千間〉（万劫ノ修功ハ実ニ続キ難シ、一時ニ煩惱百千間ハレバナリ）（『般舟讚』）と説かれていて、このように煩惱の障によつてなかなか私共が迷いの世界から離れ出ること  
は難しいのである。私共は煩惱により罪を造り、なお懺悔の心もなく迷いの世界を当所なくさ迷う存在である。

ところで、釈尊は『観経』（上品上生）に〈若有衆生願生彼国者發三種心即便往生〉（モシ衆生アリテ、カノ国ニ生レント願フ者、三種ノ心ヲ發サバ、即チ往生ス）と説き、浄土往生のためには三心を発さなくてはならないと勧めている。このようなことから、この第一段は衆生願心の分齊を譬え顕しているのである。つぎの第二段はいよいよ白道を度ることを心に決する内容であるが、大意をいえば、自力を捨てて他力に帰し難行から易行に転じさせるところの至誠心について説かれるのである。第三段は釈迦如来発遣の教えにより阿弥陀如来来迎の本願に帰する相である。それゆえに深心決定の位に譬えるのである。そして、第四段は廻向発願心を具えいよいよ即便往生する相を譬えているのである。このようなことから、

第一段〈衆生願心の分齊〉

第二段〈至誠心〉

第三段〈深心〉

第四段〈廻向発願心〉

の譬えを説いているといえる。この二河白道の譬えは『観経疏』散善義三心釈中の第三廻向発願心釈のところにもみられるから、二通りの理解ができる。

その一つは、唯、第三廻向発願心のみを譬えたとする別喩の説である。(註：例えば、鎮西派良忠)。もう一つは、文は廻向発願心のところにあっても、廻向発願心は三心の最後であるから、この譬えは三心全体の譬えであると考える総喩の説である。(註：例えば、西山證空)。私(證空)は二河白道の譬えは三心の総喩であると理解する。

さて、善導の疏の文に沿うてみていくと、まず初めに善導は〈未来悪世の諸の凡夫の中で浄土の法に帰して往生を求める人々よ〉と呼びかけ、『観経』では釈尊が〈我今為汝、広説衆譬〉といって汝と呼びかけているその人々のために、善導が二河白道の譬えを述べているのである。

しかし、譬えということについては『観経』の全体が譬喩なのである。釈尊は衆譬を説こうといわれて観経十六観を説かれたのであるから、十六観全体が譬えということになるが、その譬えを善導が二河白道の譬えをもって表そうとしたのである。だから、この二河白道の譬えは他の經典に出てくる譬喩とはその趣きを異にするのである。

もしこの三心が確実に得られたら、その後どんな困難な出来事に会っても惑わされる心が替わるということとは決していない。二河白道の譬えはどのようにして真実の信心が決定するかということを経験したものである。それでは、二河白道の譬えを実際にみてみると、

〔第一段〕

〈譬へば人ありて〉以下が譬喩である。この人とは『観経』の経文に〈未来世一切衆生為煩惱賊之所害者〉と説かれているその人のことである。

つぎに、〈西に向つて百千の里を行く〉という譬えがあるが、この〈百千の里〉には二つの意味がある。その一つは、百千は十万であるから、そこに十万億の仏土が示されていると考えることができ。もう一つは百千は唯多いということを示すのであるという理解である。私は後の方の理解がよいと思う。

浄土への往生を願う者はたとい清らかな心をもつていても煩惱具足の凡夫であるから種々の惑障がつぎつぎと起こってくる。

その〈行く手に二つの河がある〉という譬えは、通例は河は水が流れているところから名づけられるのであるが、ここで、火についても河といわれるのは炎が盛んに燃え上がっているのを河に譬えたものである。善導はこの譬えの示すところについて水と火は貪愛と瞋憎に喩えるとされる。三毒煩惱のなかで欲界の衆生は貪愛が最も多く、それゆえに仏道を求める者にとってはこの貪愛の過が最も重い妨げとなる。貪愛には二つがある。その一つは姪貪であり、好色の心である。もう一つは財貪であり珍寶を求める心である。この二つの貪愛は深くして遁れた人はないので水に喩える。そして、貪愛の心は私共の自力では断ずることができなくて機会があればいつでも起こるのである。たとえ、浄土に生まれたいと思う心を起こしても貪愛のためにその心がぐらついて変わるのである。水は器に従つ

て形を変えるが集まって大河となれば人を流す力をもつ。また、火は瞋憎に喩えられるが、この瞋憎も三毒煩惱の一つで、我執・我慢の思いが通らない時に凡夫の心に起こるものであり、害をなすことまるで火がみるみる物を焼き尽くすのと同じである。

火の河は南にあり、水の河は北にあると述べられるのは、善導の唐の国では仏教が伝来する以前から、水・火・木・金・土の五行の思想があつて、火は南を司り、水は北を司るとするからである。

〈二つの河の幅は百歩であり、底なしで南北に果てなく続いている〉と述べられるのは、私共の心の貪愛と瞋憎の煩惱の際限ないことを顕しているのである。

〈二つの河の中間に一の道がある〉という譬えの意味するところは善導は、白道とは清浄の願往生心であり、煩惱具足の凡夫の心にその清浄の願往生の思いが起こることであると述べられるのである。

〈白道の幅が四五寸である〉というのは、四は四修（恭敬修・無余修・無間修・長時修）、五は五念（礼拝門・讚歎門・作願門・観察門・廻向門）を示しているのである。これは往生の心が決定すれば四修・五念等は皆備わるということを顕すのであり、それは他力に目覚めて後に修する四修・五念であつて、微少であつても浄土往生の道となるのである。

東岸から西岸への白道の長さは河幅と同じく百歩である。

このように凡夫が心に信を起こして四修・五念の修行をしても、貪愛・瞋憎の煩惱の水火に絶えず邪魔される。白道と水火の二河とは、私共の起こすところの善心（願往生心）と悪心（貪愛・瞋憎）の勝劣を対比しているのである。

〔第二段〕

〈この人が人気のない広々とした荒野に出た時、群賊や悪獣が襲いかかってきた〉について、善導は〈人気のない沢〉とは真に善知識に遇わないことの譬えであると述べられている。真の善知識とは為煩惱賊害の衆生を教導するものである。別解・別行の人は善知識に似ているが、なお出離の道を乱すおそれがある。だから、真の善知識ではない。極楽に往生したいと願うことが肝要なのであると教え導いてくれる方こそが善知識である。

また、〈群賊や悪獣が襲いかかって来た〉というのは、善導は私共の六根・六識・六塵・五陰・四大ということであると述べられている。そして、ここで〈群賊・悪獣〉というのは私共に襲いかかってくる者であるとして表されているのである。それは、私共の貪愛・瞋憎の煩惱によつて悪業がますます盛んになることを表している。

ここで、群賊・悪獣を六根・六識・六塵・五陰・四大に喩え、後では別解・別行・悪見の人に喩えている。これについては二つの理解ができる。

まず第一は、群賊・悪獣を六根などに喩えるのは、詐り親しんで我々を殺そうとする点に喩えるのである。また、群賊・悪獣を別解・別行人などに喩えるのは、勝手に自分の考えを述べて相手の信心を乱すことを喩えるのであり、東岸より戻ってこいと叫ぶのはそのことを喩えているのである。

もう一つの理解は六賊と六塵とを合して、両方を同時に示しているとする理解である。

さて、〈この人が群賊・悪獣を恐れて西に走り去ろうとすると、目の前に急に大きな河があった〉

というのは、善知識に遇って往生の心を発して自分の貪瞋煩惱の過を知るといふことの譬えである。

〈その水火の二河の中間に一の白道を見る〉とは、私共が貪瞋の煩惱をもちながらわずかに往生極楽の信心を起こすことを喩えたものであり、その煩惱の過を想い顧みるにつけても往生の大益は得がたいと思うことを表すのである。そして、とても往生はできないだろうと疑い、救われる道はないだろうと思ひ、そのまま迷いの世界に輪廻を繰り返すのみであろうと思うのである。たとえば、聖道の修行をするとしても、とても困難であろうと思ひ人天の善趣に生まれることで我慢しようと思ふのである。

たとえば、漸頓二門の自力修行によって迷いの世界から離れ出ようとしても、阿弥陀仏の本願の強縁がなくてはとても困難なことである。極楽浄土に往生することを心底から欣んでも、なお貪瞋煩惱がつぎつぎと起こってきて往生の邪魔をするのである。そして、自らの罪過の重さに気づくにつけて、結局どちらにしてもこの迷いの世界から出られそうもない。しかし、ここでその人は往生を疑って迷いの世界から離れ出られる他の道を尋ねてみても、どの道も困難であることに気づくのである。どちらもだめなら、思い切つてこの白道を行ってみようと考えた。そして、ついに一步を踏み出した。これは観門より弘願に帰する道理を得る謂れである。

また、〈この白道を進む〉といふことは心の底からこの苦の娑婆を厭い、どうしても、苦のまったくない極楽に生まれたいという切なる心によるものである。

以上、この段は至誠心について説かれているのである。

〔第三段〕

このようにして、極楽への往生が不動なものとなると、釈尊の教説も新しく聞くような気がし、阿彌陀仏の願力も改めてますます頼もしく思われるのである。

〈今、歩み出した東の岸から行け行けという声を聞いて一歩一歩進む〉というのは、凡夫が釈尊の觀門の説によって阿彌陀仏の弘願に帰入して、これで迷いの世界から離れ出ることまちがいなしと知ることである。つまり、十六觀門の説によって自力の心をすっかり捨てて決定往生の心を生ずるのである。

〈西の岸の上に人ありて喚ぶ〉というのは、善導は私共凡夫が浄土に往生できるのは、ただ阿彌陀仏の願力によるのであるということを示しているのである。この釈尊と阿彌陀仏の二尊の心を信順することによって迷いの世界から離れ出るのである。阿彌陀仏の願力がどのように強力であっても要は凡夫がたとい貪瞋の煩惱に束縛されていても、阿彌陀仏の本願を信じて心から浄土往生を願う心もち続けることが必要である。

それゆえに、この段は深心について述べられているのである。

〔第四段〕

〈行くこと一分二分〉とあるのは、実は百歩の白道を三つに分けて考えるのであって、まず第一は至誠心を起すこと、第二は深心を起すこと、第三は廻向發願心を起すことを意味しているのである。白道は願生心を表すのであり、その願生心を三心に分けて理解するのである。

（この白道を半分以上進んだ時に後ろの岸より群賊等が今に河の中に落ちるぞ戻って来い戻って来いと叫ぶ）のは、自力の我執による人が迷いの世を離れ出るにはそんな危ない道を行かなくても他にいろいろ方法があると考えて、他力に帰した人を自分の方に引き入れようとするのである。自力を信ずる人が戻って来いと呼び返すのは好意からであつても、それは他力に帰した人を迷わせるだけである。実際、迷いの世から離れ出るのは阿弥陀仏の力によらなければ救われないのである。

その人が後ろからの呼び戻そうとする声を聞いても進む、もうその声に耳を傾けることなく聞き捨てにして一歩一歩西に向かって進むということが廻向発願心である。

最後に、（この人は西の岸に着いて水火の危険から解放され、そこで善友に遇つてこの上ない喜びを感じた）ということは、この人が三心を起こして阿弥陀仏の願力によつて極楽往生したということを示すのである。極楽往生のためには三心を起こすか起こさないかということだけが問題であつて、三心を起こしさえすればただそれだけで極楽往生ができるのである。」

「私の場合、正直いまだに死がこわい。夜中など眼をさまし、自分の死の瞬間を空想すると、何とも言えぬ慄然たる気持ちにかられ、大声で叫びたくなる。そんな場合がないとは絶対に言えない。むしろ大いにあると言つてもいいだろう」、という遠藤周作氏の文に触れました。これは平成元年一月に発刊された『新潮』の「こわがり屋の死にかた」の文章であります。

さらに、遠藤氏は「そのような弱虫でみじめで情けない男が、そんな夜、たまりかねてベットの横

の電気スタンドをつけ、〈死ぬ時は死ぬがよし〉（良寛）という優しい言葉をじっと見つめる。どうしたらこういう達観した気持ちになれるのである。羨しい、実に羨しい。私の知っている婆婆さまは九十幾つだった。達者でまだそれほどボケてもおらず、ある夜、嫁と一緒に風呂に入った。婆婆さまは先に着物をぬいで風呂場に入り「ああ、いいお湯やねえ」と脱衣室で裸はぐきになっている嫁に声をかけた。まもなく嫁が風呂場に入ると、婆婆さまは湯ぶねの縁に齧はぐきをのせて眼をつむっている。「お婆ちゃん、そんなところで、眠りはったらあかんがな」と嫁が声をかけたが、婆婆さまは動かない。死んでいたのだ。なんと素晴らしい往生だろう。ああ、いい湯だねえといい気持ちになった瞬間、この世から極楽往生したのだ。私はその話を聞いた時、涙が出るほど羨ましかった」と書かれています。

これは遠藤氏だけのものではなからう。私たちは平素、目先のことばかりに追われています。そんな生活のなかでは自身の死について考えない。

初重は阿弥陀仏の本願に打ちまかせて、南無阿弥陀仏の生活になりきることに。

「初重 安心起行作業之口訣

安心 至誠心・深心・廻向発願心

起行 南無阿弥陀仏

作業 恭敬修・無余修・無間修・長時修

(阿) 弥陀如来—釈迦如来—光明大師—日光大師—證空上人—浄音上人—(中略)—英純上人  
—随功(某甲)に伝う。某甲より汝等に授く。

右歴代相承之旨審以口授畢

受者 一拜

伝燈師 南無阿弥陀仏

第二重 三種行儀用心三想之口訣

尋常 帰命想

別時 往生想

臨終 引接想

尋常・別時・臨終の三期(善導大師『観念法門』、源信『往生要集』)において三通りの心の持ちよ  
うを授ける。

尋常(平生)は帰命の想い

五種増上縁ごしゆぞうじようえん（善導大師『観念法門』）

- 一、滅罪増上縁めつざい 如来の恵みに身も心も清められつつある悦びの想い。
- 二、護念増上縁ごねん 如来のお護りに預かっている想い。
- 三、見仏増上縁けんぶつ 如来に見えてまみいる悦びの想い。
- 四、摂生増上縁せつじよう 如来のお導きに預かっている想い。
- 五、証生増上縁しじようじよう 如来のおはからいが証得される想い。

「帰命というは、経に説くがごとく、命を仏にたてまつるといふ心なり。衆生の重んずる宝、命に過ぎたるはなし」

（西山上人）

- 一、われらはほとけの子どもなり うれしい時も 悲しいときも  
み親のそでに すがりなん
- 二、われらはほとけの子どもなり 幼い時も 老いたるときも  
み親にかかわらず つかえなん」

別時（特別）は往生の想い

五重相伝会や特別な法縁により如来のお救いを受け止められる。

「信は莊嚴しやうごんより生ず」

「必ず、必ず死ぬるのじゃないぞよ。仏法は死ぬる法は教えはせん。死なぬ法を教えるのじゃ。往生という字は死ぬるといふ字は書きやせぬ、往ゆき生うまると、書くぞよ、この通りに心得て、精出して、念仏申さつしゃるがよい。さつぱりと死ぬるのじゃないぞよ、極楽へ生まれるのじゃ」

（徳本上人）

臨終（いのち終る時）は引接いんじやくの想い

「四生無常ししやうむじやうの形、生しやうある者は死しに帰きす。哀あわれなるかな電光でんこうの命、草露そうろの朝あしたを待つが如し。悲しいかな風葉ふうようの身みんかの朝あしたにして夕ゆふに到いたらざるに似にたり」

（西山上人）

「願くば命終る時に臨んで、心顛倒せず、心錯乱せず、心失念せず、身心に諸の苦痛なく、身心快樂にして、禪定に入るが如く、聖衆現前したまい、仏の本願に乗じて、阿弥陀仏国に上品往生せん。彼の国に到り已つて、六神通を得て、十法界に入て、苦の衆生を救摂せん。虚空法界も尽きんや、我が願も亦、是の如し、発願し已ぬ、至心に阿弥陀仏に帰命し奉る」

(善導大師「発願文」)

## 臨終の三愛

- 一、境界愛　　周囲の縁者との別れを惜しむ思い。
- 二、自体愛　　自分の身体に対する愛着の思い。
- 三、当生愛　　自分の靈魂の行く先についての思い。

「臨終には阿弥陀ほとけの来迎に預かつて、三種の愛心を除き、正念になされまいらせて、極樂に生れんと思食べく候」

(法然上人)

● ゆうやけこやけ

「ゆうやけこやけ」、この歌は皆さんご存知ですよ。それでは皆さんと一緒に歌いましょう。

「ゆうやけこやけで 日が暮れて

山のお寺の 鐘が鳴る

お手々つないで 皆帰ろ

鳥と一緒に 帰りましょ

子供が帰った 後からは

円い大きな お月さま

小鳥が夢を 見るころは

空にはきらきら 金の星」

実はこの歌の中には極楽世界、西方浄土の内容が込められているのです。大正十二年（一九二三）に作られた中村雨紅さんの作詞です。例えば、みな帰るのは極楽浄土に帰るということです。阿弥陀仏は無量の寿命の仏、無量寿仏に護られ、先祖も往生されている西方極楽浄土へ帰りましょと言いうことです。鳥とは観音菩薩の来迎の意趣が込められています。光り輝く、光明の世界（西方極楽浄土）

へ帰りましようとした歌詞なのです。

「 みほとけに抱かれて

一、みほとけに 抱かれて 君ゆきぬ 西の岸

なつかしき おもかげも 消えはてし 悲しさよ

二、みほとけに 抱かれて 君ゆきぬ 慈悲の国

みすくいに 身をかけて しめします かしこさよ

三、みほとけに 抱かれて 君ゆきぬ 花の里

つきせざる たのしみに えみたもう うれしさよ

四、みほとけに 抱かれて 君ゆきぬ たまのいえ

うつくしき みほとけと なりましし とうとさよ  
」

「第二重 三種行儀用心三想之口訣

尋常 歸命想

別時 往生想

臨終 引接想

(阿) 弥陀如来—釈迦如来—光明大師—源信僧都—円光大師—證空上人—浄音上人—(中略)—英  
純上人—随功(某甲)に伝う。某甲より汝等に授く。

右歴代相承之旨審以口授畢 』

受者 一拝

伝燈師 南無阿弥陀仏

## 第十席

### 第三重 弥陀弘願教十念之口訣

「設我得仏十方衆生至心信樂欲生我国乃至十念若不生者不取正覚」

（もし我、仏を得たらんに十方の衆生、至心に信樂して、我国に生まれんと欲し、乃至十念せんに若し生ぜずんば正覚を取らじ）

（『無量寿経』第十八願）

阿弥陀仏について学ぶのが第三重である。

『無量寿経』には阿弥陀仏が正覚（成仏）された謂われ（理由）について説かれている。

「仏心とは大慈悲これなり。無縁の慈しみを以て諸々の衆生を撰するなり」

（『観無量寿経』）

無縁とは無条件である。

「月影つきかげの いたらぬ里は なけれども 眺ながむる人の 心にぞ澄すむ」

(法然上人)

### 弘願教くわんぎょう

弘願とは広弘誓願こうぐせいがん、四十八願、本願のことである。

第十八願は王本願と呼ばれて正因の願である。

阿弥陀仏の広大無辺のお慈悲については一円相いちえんそう（円満）で表現する。

十念は十重円満の義であり、単なる十の数字ではない。

十の横線の一は南無の衆生、縦線の―は阿弥陀如来を示している。

南無阿弥陀仏に願と行が具足ぐそくされている。人間の往生（救い）と阿弥陀仏の正覚しょうがく（さとり）は同時に成就される。

「証しよ不由ふゆ他た」

（善導大師）

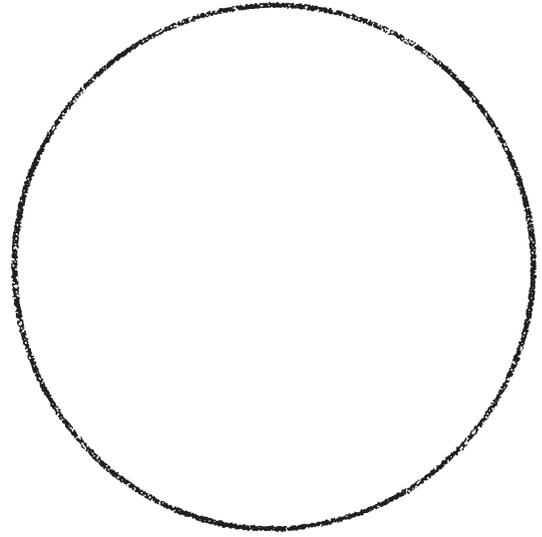
釈尊を経ずに阿弥陀如来から直々に善導大師に相伝される。

「雲晴れて 後のちの光りと 思ふなよ もとより空に 有明ありあけの月」

（法然上人）

「第三重 弥陀弘願教十念之口訣

設我得仏十方衆生至心信樂欲生我国乃至十念若不生者不取正覺



(阿) 弥陀如来—光明大师—円光大师—證空上人—浄音上人—(中略)—英純上人—随功(某甲)  
に伝う。某甲より汝等に授く。

右歴代相承之旨審以口授畢 一

受者 一拜

伝燈師 南無阿弥陀仏

第四重 釈迦要門教十念之口訣

「如<sup>に</sup>是<sup>によ</sup>至<sup>ぜ</sup>心<sup>し</sup>令<sup>し</sup>声<sup>ん</sup>不<sup>り</sup>絶<sup>や</sup>具<sup>ま</sup>足<sup>じ</sup>十<sup>じゆ</sup>念<sup>う</sup>称<sup>ねん</sup>南<sup>し</sup>無<sup>やう</sup>阿<sup>な</sup>弥<sup>む</sup>陀<sup>あ</sup>仏<sup>だ</sup>称<sup>ぶつ</sup>仏<sup>し</sup>名<sup>ふつ</sup>故<sup>み</sup>於<sup>よ</sup>念<sup>ち</sup>々<sup>ゆ</sup>中<sup>じ</sup>除<sup>よ</sup>八<sup>は</sup>十<sup>ち</sup>億<sup>じゆ</sup>劫<sup>う</sup>生<sup>こ</sup>死<sup>ねん</sup>之<sup>ん</sup>罪<sup>ち</sup>」  
 (かくのごとく、至心に、声をして絶えざらしめ、十念を具足して、南無阿弥陀仏と称えしむ。仏の名を称うるがゆえに、念々の中において、八十億劫の生死の罪を除く)

(『観無量寿経』下品下生)



「心」の字が赤色になっている。これを赤心とする。古来から「せきしん」と呼ばれる。心は真実心であり、信仰により燃え上がる歓びの心を表す。

### 要門教

釈尊によって説かれた八万四千の法門のなか、我ら凡夫のために説かれた要門教（浄土三部経）をもつて授ける。

「釈迦如来は実にこれ慈悲の父母なり、種々の手立て（てた）をもつて、われらに無上の信心をおこさしめらる。また種々の手立てを説かれて、教門一つにあらざるも、ただわれら倒見（とうけん）の凡夫のためなり」

（善導大師『般舟讚』）

南無阿弥陀仏は釈尊（しゆつせほんが）の出世本懐の要門である。

第四重では一円相のなかに浄土三部経を承けた善導大師の釈文（『観経疏』玄義分）で示される。それは願と行についてである。

横（願）

「言南無者即是歸命亦是發願廻向之義」

（南無と云うは即ちこれ歸命またこれ發願廻向の義なり）

縦（行）

「言阿弥陀仏者即是其行以斯義故必得往生」

（阿弥陀仏と云うは即ちこれその行なり。かかる義を以ての故に、必ず往生を得る）

願行具足の念仏

横が衆生で（願）

縦が阿弥陀仏で（行）

二祖対面

第四重は古来より善導大師（六一三〜六八一）と法然上人（一一三三〜一二二二）のご対面によって相承されたことを示す。

夢中の相伝

時代（五百年以上）と国（中国と日本）の隔たりを超えた不思議な出会いである。

善導大師 半金色（腰から下は半金色、上は墨染め）

法然上人 墨染め

仏壇の両脇侍

「仰いで本地（善導大師の本身）をたずぬれば、四十八願の法王（阿弥陀如来）、俯して垂迹（善導大師）をとへば、専修念仏の導師なり」

（法然上人「善導讃仰の言葉」）

「第四重 釈迦要門教之口訣

如是至心令声不絶具足十念称南無阿弥陀仏称仏名故於念念々中除八十億劫生死之罪



(阿) 弥陀如来—釈迦如来—龍樹菩薩—天親菩薩—曇鸞大師—道綽禪師—光明善導大師—懷感禪師—少康法師—円光大師—證空上人—浄音上人—(中略)—英純上人—随功(某甲)に伝う。某甲より汝等に授く。

右歴代相承之旨審以口授畢 一

受者 一拜

伝燈師 南無阿弥陀仏

## 第十一席

### 第五重

けつじようおうじようあんじんじゆうねんのくけつ  
決定往生安心十念之口訣

口南無阿弥陀仏

十念業成亦通神言必

有口授不得題筆点矣

(十念業成はまた神言に通ず、必ず

口授あり、筆点に題すること得ず)

阿弥陀如来の面相を表現している。

念仏行者の相は仏身である。

第五重には文が無いのは、西山上人が弥陀直授の己証によるからである。

「衆生の心想中に入る」「衆生の心想中に影現す」

（『観無量寿経』）

第五重は西山上人の己証の法門であり、阿弥陀仏の面相に想いの心を止めて称えることを授ける。阿弥陀仏がこの凡夫の身に宿ってくださいされる。そこに身器清浄となり、この身このままが南無阿弥陀仏となる。

面相の十念の別称

「八幡相承の十念、みだじきじゆ弥陀直授の十念、しきしんとうしよ色身当処の十念、けつじようおうじようあんじん決定往生安心の十念」

西山上人

関東遊化においてつるがおかはちまんぐう鶴岡八幡宮に七日間のさんろつ参籠の時にたくせん託宣を受ける。

阿弥陀如来から直々の相承になる。

「如来の左（右）の御眉（御目、御耳、御鼻孔）に心を止めて」（伝燈師）  
「南無阿弥陀仏」（受者）

「如来の御口（眉間の白毫）に心を止めて」（伝燈師）  
「南無阿弥陀仏」（受者）

「南無阿弥陀ほとけのみ名と思いに称える人の姿なりけり」  
「たたらふむ鑄物師が鑄型土なれど、なかにこがねの仏まします」

（西山上人）

第五重 決定往生安心十念之口訣

口南無阿弥陀仏

「如来の左の御眉に心を止めて」

（伝燈師）

「南無阿弥陀仏」

（受者）

「如来の右の御眉に心を止めて」

（伝燈師）

「南無阿弥陀仏」

（受者）

「如来の左の御目に心を止めて」

（伝燈師）

「南無阿弥陀仏」

（受者）

「如来の右の御目に心を止めて」

（伝燈師）

「南無阿弥陀仏」 (受者)

「如来の左の御耳に心を止めて」 (伝燈師)

「南無阿弥陀仏」 (受者)

「如来の右の御耳に心を止めて」 (伝燈師)

「南無阿弥陀仏」 (受者)

「如来の左の御鼻孔に心を止めて」 (伝燈師)

「南無阿弥陀仏」 (受者)

「如来の右の御鼻孔に心を止めて」 (伝燈師)

「南無阿弥陀仏」 (受者)

「如来の御口に心を止めて」 (伝燈師)

「南無阿弥陀仏」 (受者)

「如来の眉間の白毫に心を止めて」 (伝燈師)

「南無阿弥陀仏」 (受者)

十念業成亦通神言必

有口授不得題筆点矣

「衆生称念必得往生」

「右歴代相承之旨審以口授畢

維時 平成二十五年四月二十八日

妙見山 靈龜院 白翁寺 第十九世

伝燈沙門 積空随功

授與 』

## 蓮華座と血脈授与

### 蓮華座

蓮華座れんげざは五重相伝を受けた証あかしであり、生き菩薩として讃嘆さんたんされる。

「弥陀不思議の願力に乗じて蓮華の中に自然じねんに生を受く」

「生きて身を蓮はちすの上に宿やどさずば 念仏申す 甲斐かひやなからん」

(西山上人)

「一者至誠心、二者深心、三者廻向發願心、具三心者必生彼国」

（『觀無量壽經』）

### 蓮の八徳

- 一、華果同時の徳 けかどうじ 華が開くと同時に果が出来ている。一切衆生悉有仏性
- 二、泥中不染の徳 でいちゆうふぜん 泥から出ても泥に染まらない清浄無垢である。
- 三、一茎一華の徳 いつけいいつけ 一茎一華一葉で貪欲がない。
- 四、蓮糸織布の徳 れんししふ 織物として活用される。
- 五、蓮根食用の徳 れんこんしよくよう 蓮根は食することができる。
- 六、不着水滴の徳 ふちやくすいでき 水滴は玉となり滑り落ちる。執着の心がない。
- 七、蓮果薬用の徳 れんかやくよう 漢方薬として重宝する。
- 八、蓮台乗仏の徳 れんたいじようぶつ みほとけさまが着座される。

### 血脈授与

血脈授与は法名（生き菩薩の称号）を授けられる。  
相承を記した系譜（血脈）を授与される。

## 第十二席 五重相伝会の結び

「受け難き人身を受けて、遇い難き本願に逢いて、発し難き道心を発し、離れ難き輪廻の里を離れ、生まれ難き浄土に往生せんこと、よろこびの中のよろこびなり」

(法然上人「二紙小消息」)

「 味のもとの歌

- 一、山また山の人生じゃ 重荷おもにを背負せおつて越すからにや  
何か苦もあり 世話もあり 都合よしあし おいしげる
- 二、中を流るる水のように いつもさらさらさつぱりと  
よけりやよいまま 悪わるければ 悪いそのまま 気にかげず
- 三、甘いばかりが味じゃない からいにかいも味のうち  
なむあみだ仏は 味のもと 拝おがみはたらく 味のよさ

「生いけらば念仏の功つもり、死なば浄土へ参りなん、とてもかくてもこの身には思いわずらうことぞなきと思ひぬれば死に生き共にわずらいなし」

(法然上人『勅修御伝』)

●中国旅行 五十樓辰男氏 慧光 小川一乗 東井義雄『仏の声を聞く』 鈴木章子『癌告知の後で』

釈尊は六道輪廻を説かれています。六道とは地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天の世界であります。この六道を自業自得の道理により輪廻転生しています。地獄界などの悪道に堕ちるとただ苦しみのみ受けます。その様子は源信の『往生要集』などに見られます。もとより人間界も苦しみを受ける世界です。だが、地獄で受ける苦しみに比べれば少なく、苦と楽が相交わる世界です。

人間の生活には享楽もありますが、辛苦もあります。「暑さ寒さも彼岸まで」と言われます。この言葉は四季に合ってるから、日本では暑さ寒さも彼岸が区切りであると理解されています。実は暑さ寒さは人間として受ける苦しみを例えているのです。人間にとっての究極の苦は生・老・病・死の四苦であります。四苦は自身の意思で避けようとしても避けられません。そして必ず受けなければならぬ苦であります。「暑さ寒さも彼岸まで」の「彼岸」とは極楽浄土のことなのです。阿弥陀仏の極楽浄土に往生させていただけば苦を受けないということですが、浄土で受ける法楽については『浄土三部経』に説かれています。だから、『浄土三部経』を通して、阿弥陀仏と極楽浄土について理解することが大切になります。

法然上人は「生いければ念仏の功つもり、死なば浄土へ参りなん、とてもかくてもこの身には思いわ  
ずらうことぞなきと思いぬれば死に生き共にわずらいなし」と説かれています。

法然上人は仏の無量の寿命の中に生きられています。生きている間は念仏を称えさせて頂き、死を  
迎える時には阿弥陀仏の来迎を頂き、遂には極楽浄土に往生させていただく。だから生死とも煩いが  
無いのです。このように念仏には生死を越える功德があります。

私が現在勤めています京都西山短期大学は総本山の粟生光明寺に隣接しています。古都の長岡京市  
にあります。長岡京市の市長を二期十二年勤められた五十棲辰男氏は光明寺の末寺の檀家であります。  
市長としての信望もありましたが、後に政治の世界から離れられました。住職がいつも南無阿弥陀仏  
と念仏を称えているが、これはどういうことかという関心を持たれました。そこで、社会人学生とし  
て京都西山短期大学に入学されて南無阿弥陀仏の研究をされました。さらに長岡京市の歴史には細  
川ガラシや等々がいますが、もっとも長岡京市に貢献された方は誰かと考えられました。その結果、  
総本山光明寺を開創された熊谷次郎直実であるとされました。そこで熊谷直実と南無阿弥陀仏につい  
ての勉強をされました。私も大学で『浄土三部経』を永年教授しています。五十棲氏は私の授業も受  
けられました。暫くしてから、「先生、今度、中国へ行きます。長岡京市は中国の浙江省寧波市と姉  
妹提携しています。中国からの招待があり参ります」「何かお土産が必要であれば買ってまいります」  
と声を掛けてくださいました。住職している京都の観世寺は京都洛西観音霊場の第二十七番札所に  
なっています。聖観世音菩薩が祀られています。その時に、五十棲氏に観音菩薩の説法を伝えてくだ

された僧の拓本があればとお願い致しました。観音菩薩の説法とは『般若経』六百巻のことであります。『般若経』には空の教えが説かれています。そして『般若経』六百巻の要諦を『般若心経』に纏められています。中国の玄奘三蔵（六〇二〜六六四）が十七年に亘る苦難の求法の旅をされて、インドから中国へ持ち帰り、中国語に翻訳されました。玄奘三蔵の旅行記は『大唐西域記』として残されています。玄奘三蔵は仏典を求める為に国禁を犯し、永年の歳月をかけてインドを往復した史実を踏まえたものなのです。それを広く『西遊記』として紹介されました。孫悟空とは「空を悟る」という名前にも知られるように、空の教えが説かれています。江戸時代の学僧が空を研究しても、その要諦を究められない。側で鳩が鳴いていた。その時に、学僧は「鳩はくうくうと鳴けども、空の義知らず」と書物に書かれています。人間は物事に執着して苦しみを受けています。空は執着を超える世界が説かれているとされます。

五十棲氏は玄奘三蔵の拓本とともに善導大師の拓本も届けてくださいました。善導大師は法然上人の師僧であるが、法然上人の夢の中で阿弥陀仏の化身として現われ、その教えによって、法然上人が浄土宗を開宗され、私達は念仏の教えに預かっているのです。善導大師も中国の僧ですが、この様な法然上人との法縁により、阿弥陀仏の本願によって私達もお救い頂けることを示された高祖であります。拓本を届けてくださった頃、近くの石材店の会長が朝参りされていました。実は会長は息子に石材店を引き継がせたので、時間もできたからと、早朝より観世寺の勤行に参られていました。勤行では家内安全のためにも、『般若心経』も一緒に唱えていました。そんな折に五十棲氏から頂いた拓本

を見ていただきました。そうすると、会長は「この拓本を石刻で復元しましょう」と言われました。会長は直ぐにインドから綺麗な黒御影石を輸入調達されました。私は会長に「中国に断りなく、勝手に作っても怒られないですか」と尋ねました。会長の返事は素敵でした。「先生、大丈夫です。見つかるまでは大丈夫です」と言われたのです。

そんな直後に、中国からの留学生である慧光様が観世寺を訪ねて来られました。実は空の研究の為に大谷大学の小川一乗教授のもとに留学されていたのです。慧光様はその石刻を見るなり、「先生、私、是非ここで得度させてください」と言われました。そこで私は法然上人の御命日（一月二十五日）に得度式が出来るようにと約束して実施しました。彼には法名を随法として授けました。

大谷大学の小川教授のことについては先日もお話いたしました。北海道の真宗大谷派寺院の住職ですが、空の研究の第一人者です。慧光様は小川教授のもとで『般若経』の空の研究をされて、すでに博士号の学位を取得されて、現在は中国北京のチベット仏教研究所に勤めています。現在は研究のためチベットやオーストリア、さらに龍谷大学にも招かれて研究をしています。実に世界的に頑張つて仏教の研究をしています。そんな関係もあって、中国やチベットからも白翁寺の五重相伝会に参加して頂いています。

先日お話いたしました「目が覚めてみたら生きていた」は東井義雄師の言葉であります。『仏の声を聞く』はNHKの宗教の時間に放送された東井師の講演を纏められたものです。視聴者がとても素晴らしいので、「あれを本にしていきたい」という要望から出版されました。その中に小川教授

の妹である鈴木章子様のご紹介されています。

「北海道の知床半島のつけ根のところに、西念寺と言うお寺があります。そのお寺の坊守であられた鈴木章子さんは、はじめは乳癌ということでしたが、それが、左肺に転移、さらに右肺に、両肺全体に散弾をうち込んだようにひろがり、子宮に、卵巣に、最後は脳に転移、昭和六十三年十二月三十一日、四十七歳という若さで往生されました。「乳癌が左肺に転移して、手術のため北大病院に入院しています」という便りをいただいたのは、私が癌手術のため入院する直前でした。私は、すぐ、「如来さまは、真如の世界にじつとしておいでになることができず、あなたさまのご病床におでましになり、阿弥陀経の『今現在説法』ということばそのままに、あなたのために、今も現にご説法なさっているはずです。あなたが気づきになったことは、あなたが気づかれたというよりは、如来さまが、気づかせてくださっているのでしょう。どうか、できるだけ努力して、そのご説法を記録してください。記録することによって、ご説法が、いよいよはつきり、確かなものになって、あなたに届いてくださるばかりか、ご縁のあられる皆さんにとっても、大切な指針となってくくださるでしょう」と、お願いしました。それに対し、鈴木さんは、またすぐ返事をくださり、「ご説法は、お寺で、お坊さまから聞くものと思っていましたら、この病床が、ご説法を聴聞する一等席であったとは」と喜んでくださり、それから、亡くなるまでの一年四ヶ月ばかりの間に、大学ノート五冊、二八〇篇近い記録を『私の如是我聞』として、書き遺していただくのです。その中に、「交通事故などで、突然の死を賜っても仕方がないのに、癌を賜ったおかげで、生死の一大事について、尊いお育てをいただ

くことができた」と、「癌」に感謝なさっている記録があります。「癌」を、喜びのタネにしていらつしやるのです。「癌」を超えていらつしやるのです。（中略）鈴木さんの「癌」は、最後には、頭に転移するわけですが、ご主人鈴木真吾師からのお便りによると、

「脳手術のために、くりくり坊主になった自分の頭を指して

臨終は私の卒業式

そして

お浄土の入学式

わたし

お浄土の一年生よ

と、笑ってみせてくれました」

と、ありました。「死」も「苦」にはならないのです。（中略）癌を得てから、私は、主人と寝室を別にしてもらいました。癌につきあってもらっていたら、主人のからだが壊れてしまうからです。このことを、私は、『おやすみ』という詩にしました。

おやすみ

「お父さん ありがとう またあしたあえるといいね」と手を振る  
テレビをみている顔をこちらに向けて主人が

「お母さん ありがとう またあしたあえるといいね」と  
手をふつてくれる

今日一日のしあわせが 胸いっぱいにあふれてくる

そして 朝は

「お父さん、あえたね」

「お母さん、あえたね」と

恋人同士のような暮らしをしています

振りかえってみると

この四十六年間 こんなあいさつを

一度だけしたことがあったでしょうか

みんな

がんをいただいて気づかされたことばかりです

と、ありました。「お救い」の中では「現実」が、こんなに輝いてくださるのです。「光明遍照」なの

です。

そして大学ノート五冊、二百八十篇近い記録は『癌告知のあとで』と言う著書として出版されました。そこには次のような心情が書かれています。

## 「 癌

癌といわれて

死を連想しない人がいるのだろうか

医学の進歩した現在

死と直面できる病いに

仲々出会うことができない

いつ死んでも不思議でない私が

すっかり忘れて うぬぼれていたら

ありがたいことに

癌という身をもって

うぬぼれを碎いてくれた

どうしようもない私をおもって

この病いを下さった

おかげさまで おかげさまで

自分の愚かさが

少しずつ見えてきまして

今現在説法の法座に

座わらしてもらっています」

東井師には次の言葉も残されています。

「あすがある

あさつてがあると

思っているあいだは

なんにもありはしない

かんじんの「今」さえ

ないんだから」

さらに、鈴木様は「旅」と題して次の言葉を残されています。

「旅

旅費を使い終わったら

わが家に還れば

それでよし

人生旅行：

充分たのしんで

うんと羽根を伸ばして

あーたのしい旅だった

ありがとう」と

還らせてもらおう…」

法然上人の歌には「われもと極楽にありし身なれば定めて帰りゆくべし」とあります。鈴木様は「死」という題で書かれています。

「死

「ただいま」と戸をあけたら

「いやあ おかえり」と

みんなが 声をかけてくれそうな

死とは そんな気がします

〃命わけあいし者 またふたたび

ここに会える〃

どこかできいた言葉だけど

まさに、ピッタリ：」

鈴木様の著書の最後には、

「念仏は

私に

ただ今の身を

納得して

いただいでゆく力を

与えて下さる」

という言葉で結ばれています。念仏に確証を得られているのです。念仏の功德は広大なのです。南無

阿弥陀仏の念仏に全てが極まるのであります。共々に生涯に亘り念仏生活に生かされたく念願いたします。

最後に『鎮勧用心』を唱和いたし勸戒を終わりにさせていただきます。

「ねむりて一夜をあかすも報仏修徳のうちにあかし、さめて一日をくらすも弥陀内証のうち暮らす。

機根つたなくとも卑下すべからず、仏に下根を撰する願います。行業とぼしくとも疑うべからず、經に乃至十念の文あり。

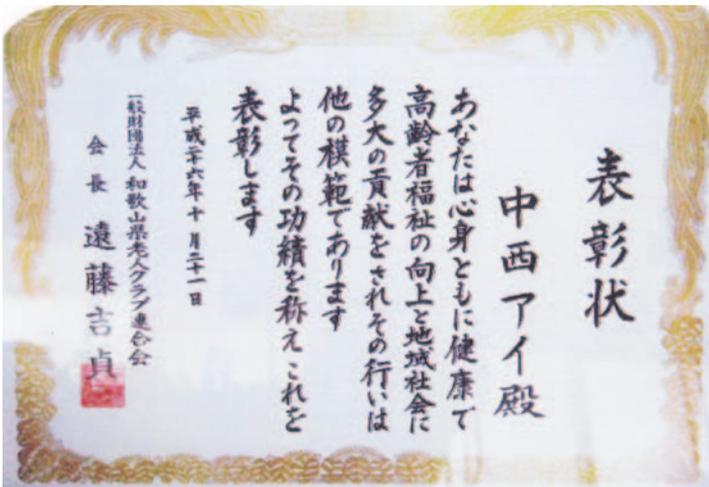
はげむも欣ばし正行増進の故に。はげまざるも喜ばし正因円満の故に。徒に機の善悪を論じて、仏の強縁を忘るること勿れ。不信につけてもいよいよ本願を信じ、懈怠につけても、ますます大悲を仰ぐべし」

(西山上人「鎮勧用心」)

## 参考文献

『五重相伝要解』 稲垣真哲 総本山禅林寺宗務所 昭和三十四年刊

『西山流五重伝法栞』 吉水仰哲 昭和四十七年刊  
『五重勧誡録』 橋本随暢 平成十八年刊  
『五重相伝勧誡のしおり』 橋本随暢



母親（中西アイ）89歳 高齢者福祉表彰

## あとがき

中西 随 功

この度の五重相伝会は「はじめに」に述べているような法縁により勤めさせていただきました。この法縁の開筵のために推進委員の役員には多大なる尽力を頂きました。そして集ってくださったのは百九名の受者をはじめ手伝いも兼ねて参加してくださった方々でありました。東京浄宗学会からは孫鳳雲会長や会員、さらに京都からは中国やチベットからの留学生もいました。

また『五重相伝会勸誡綱要』を刊行するにあたって心より尊敬する浄宗学会の浄空法師や台湾の悟道法師から尊い序文を寄稿して頂きました。そして、台湾で活躍されている江逸子画伯からは書画を寄せて頂きました。そして本書が浄宗学会と悟道法師の御尽力により中日両国語にて出版してくだされることになり心よりの感謝を申しあげます。

とりわけ私の勸誡（説教）のテープから原稿を作成してくだされた永山勉氏には深く御礼を申し上げます。また受者である御前宗治氏より写真の提供を受けています。

ことに五重相伝会の全日程に参加してくだされた母親の中西アイが聴聞してくだされていたことは生涯の良き記念となります。数年前に母親が親戚の西川弘海氏に連れられて我家の先祖になる中西慈芳上人の事跡を訪ねてくだされた貴重な記録や写真も活用させて頂いています。

ここに御縁を共有させていただけた全ての方々に対して謝意を申しあげます。地球上に念仏信仰の隆盛がもたらされて世界平和と人民平安が実現されることを祈念いたします。

五重相伝会勸誠綱要

中西随功

編







華藏淨宗學會  
THE CORPORATION  
REPUBLIC OF HWA DZAN SOCIETY

本會一切法寶，免費結緣，禁止販售，請勿擅改內容，歡迎翻印流通。

This book is for free distribution. It is not for sale.  
Printed in Taiwan.